

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



平成27年秋号

卷頭言

秋が来た

八月も廿日を過ぎると残暑もどこか秋の気配がありますが、今年の夏は長雨ののちの日照りはあまりにも対蹠的で、極端でした。我が家の裏庭の名も知れぬ大木の新緑の葉が長雨とともに一斉に落ち、葉は黒ずみ地面を覆いました。私はすることもなく日がな一日テレビを見ながら読みさしの本雑誌をめくって、すごしましたがおかげで世間の様相は大方わかっています。つまり世間は「反対」の声に満ち満ちているのです。政府主導のほとんどは「反対」なのです。しかし今や「川内原発」は動き出しました。世界中の新興国主体で原発の需要がますます高まるでしょう。我が国も技術の革新を重ねなければならぬでしょう。

さて今年の夏私がかもとも感動したのは、高校野球でした。創設百年自記念の年だそうです。ここには反対の声はありません。朝早くから応援の観客で甲子園球場は満員です。今や夏の高校野球は日本文化の重要な位置を占めています。全国から四十九校が県を代表して戦うのです。勝っても負けても礼に始まり、礼に終わるマサに日本です。決勝戦は文字通りの壮絶でした。東海大相模が6〜6の九回にピッチャーが一振りホームランで決めました。私は仙台育英がなればれと念じていましたが残念。春夏通して東北勢は大会始まって以来一度も優勝したことがない。戊辰の役の因縁を一寸だけ思いました。だが近い将来白河の関を深紅の優勝旗が堂々と越えひるがえる日を信じています。

(洪朝記)

目次

つゆがきた	入来院重朝	1
益壽滋雄先生を偲ぶ	入来院重朝	4
再びハル・ノートについて	百田 陽一	7
無題	十五代沈壽官	8
ニッポン丸ツアー	江藤ヤエ子	12
奇跡の中に生かされる	川涯 利雄	15
入来薪能と母	串田 久子	21
鹿児島県人七士の墓—歴史を訪ねる旅（4）		
	下土橋 渡	23
中津隊、増田宗太郎—歴史を訪ねる旅（5）		
	下土橋 渡	27
西南の役薩軍戦士菩提寺の事	宮下 亮善	34
茶わん虫のうた	中山とし子	41
入来院貞子さんの足跡から国体を考える		
	中西 喜彦	51
知力脚力金力魅力	澁谷 繁樹	63
時の過ぎゆくままに（5）		
エンヤコラ今夜も舟を出す		
	桐野 三郎	66
編集後記	中西・下土橋・渋谷	88

つゆがきた

入来院重朝



今年も半分過ぎます。一年前私は坐骨神経痛が発症しほとんど何もできませんでした。一年たち痛みはさり、おかげで今はたいがいなんでもできます。これは渋谷君がいい先生を紹介してくれたおかげです。もつべきは良き友であります。ありがとうございます。

さてつゆがさり夏がくると例の戦後七〇年が巡ってきます。最近の七〇年談話云々の話が沙汰やみになった感がありますが、これは四月安倍総理の米国議会での演説の見事な成功で万事OKになったのではないか、とそんな気がします。ここ一番にかけたトッチャンボーヤの面目躍如たるものがありました。

さて、目下世界は分裂中です。恐らく将来近いうちに大分裂に至る序章が例の「AIBJ」に得たりや応とばかり昨年分裂をまぬかれて一息ついたイギリスがのり、あとに続けとばかりヨーロッパ勢が続きました。先進七カ国が二分裂したわけです。つまり腹の底ではヨーロッパ勢はアメリカなどオレ達の植民地と思っていた。つまりバカにしていた。それが金の切れ目がなんとやらで、宗主然としているイギリスがついにアメリカを見切ったというわけです。しかしイギリスこのどうしようもないしたたかな近代世界七つの海を支配した誇り高きバイレートの末裔がシナの本質をマットウに把握した上でのことか、私はいささかあやしいと思います。

シナの実体は本当はよくわからない。これは現在のシナの中核にいてシナを日常支配している連中ですらホントのところはわからない

いのではないか。最近流れてくる情報は、国内には在庫の山が累々と続きその捌口は当分見当たらず、おまけにおかねも実は不足勝ちだとか。火のないところに煙は立たないというから大体当たらずとも遠からずというところでしょう。

今回日本がどうして習近平の執拗な誘いにのらずに済んだのか、一つにはアメリカに対する配慮ももちろんだが、それだけではなく私は一言で神助の賜物だったと思っています。

四月のトッチャンボーヤの米議会での演説が日本の一本立ちを世界が認めるところとなつて弱虫オバマをちよつと元気づけただけでなく、ヨーロッパからそして、シナからバカにされた若きアメリカ人全体をエンカレッジしたというわけです。こうして日本はアジアのリーダーとなつたわけです。ただその自覚は目下国会での安保法制論議をきいていると

全くないと私は思っています。

大体我が国の議員先生方の大半は世襲でありつまり家業職であります。本来国家の行く末に断固とした責任をもたなくてはならぬ筈ですが、我が国ではそうならなかった。これは明治政府の性格とからみますが、はしょつていうと身内同類の利益第一つねに時勢のおもむくところに沿い長いものにまかれろです。特に戦後世代は ユダヤ の洗脳教育の効能がなかなかよく効きすぎて彼等の議論をたまにきいているとせいぜい新制中学二年生程度の学級委員会の演説会です。

明治一一新以来日本のくには表層が変わりました。つまりサムライ不在、日本の心をつくつていた武の魂の不在です。それでもちゃんと時世時節とばかり、トッチャンボーヤが出現するから日本国は不思議なクニです。

今回五十七国の参加で「AIBJ」が出發進行

しますが、シナは共産党独裁国家です。したがってかつてソビエト連邦が崩壊に至る過程を反面教師として研究していかないわけがない。その学習の成果の一つが習近平の軍への配慮としたがって軍備増強に余念がないことです。つまり普通のクニでは全くない。その上シナ民族の古来から変わらぬその特異な特徴たとえば金銭へのあくことのない欲望等いづれも参加国はそれらをイヤという程しるところとなるでしょう。

ロンドンシティをベースキャンピングにして世界を支配してきた金融マフィアの団結がゆるがないかどうか、一九一三年以来FOMをフロントにして百年間ドル発行権を握りアメリカをヤドリ木にしてきた金融マフィアのこれらの挙動が見ものです。

アメリカも実質国内は分裂中です。来年の大統領選挙であらためて統一国家を維持出来

るかどうかがとりあえずの課題です。

わが日本国の課題は勿論サツサと憲法改定してホンモノの独立国になることです。

さてツユの晴れ間に庭に出てみるとみどりは濃く貞子手植えのアジサイがそれぞれ個性的なツボミを開いている。一度刈り込んだ芝生並びに生垣の植え込みの今を盛りと色とりどりの花を咲かせるツツジの根本にまた築山に再び伸びる草花、これらを早目に刈り込まねばならないと心がせく、しかしいつやるかつゆの中休みを見て近日中にそれも早朝にと思ふ。

(炬ばたセイ談庵主)



益寄滋雄先生を偲ぶ



入来院重朝

昨年十号に書いていただいた「肺癌の記」

を二度三度読み直しました。たんたんとして事案を経過に沿って報告されている。そして死の方について先生は一つの方法として思うところを懇切に述べておられる。最後に「終末期医療ケアへの意志表明書」(サンプル)を示していただいている。間然として見事です。悠揚として迫らぬ日常の先生のお人柄そのものです。

昨年十一月私は旧い友人に誘われて境港にカニを喰いに行つて翌日十八日駅前で昼シシをつまみ出雲に向かつて列車を待つていたと

ころケイタイが鳴りました。先生でした。九月二十五日私の誕生日にセイ談会の集まりがありました。一寸遅れてみえた先生と私は皆さんがお帰りになったあと二人で亡き女房が恋しいと言ひ合つて呑みながら、次は先生の十二月の誕生日確か十四日に一緒に呑む約束をしたのでした。

それがどうしても果たせないと云うのです。入院中の病院からの電話でしたが、少々声に張りがなかつた気がします。いよいよダメかと私は思いました。翌十二月二十二日午後四時五十一分先生は八十二歳の生涯を閉じられました。

告別式でなつかしい人々に会いました。

宮之城ロータリークラブのメンメンです。

私が先生にお会いできたのもすすめられてそのクラブに入会したからです。東京から引き揚げてきたのが平成七年でしたが、それか



益壽滋雄先生遺影（自ら写真館に向向かれて撮影された）

らしばらくして私が無聊をかこっていると思
ったかそのクラブの幹部の方々が入会を勧誘
にみえられたのでした。妻貞子もすすめてく
れました。私は週一の呑み会があるというの
につられたのでした。その会で地方のそれぞ
れの分野で活躍されておられる方々と仲良く
なったのですが、特に益寄先生とは少年期
の友人の一人が共通であり仲良かったことで
特に親しくなつたのです。週一の呑み会には
毎週妻貞子が迎えに来てくれました。

それから数年たつて私が軽い脳梗塞で一週
間ばかり入院したのを期にクラブを退会した
のでした。先生とは連絡が絶えずセイ談会
三号に「悪口雑言」を書いていただきました。
これは題に似ずわが国と国家に永久的な屈辱
と不名誉と損害をもたらした「河野談話」へ
の寸言です。四号に「老人党を立ち上げよう
」八号に「裁判員制度は司法の逃げではない

か」とそれぞれ納得「我が意を得たり」とヒ
ザを打ちたくなるのです。

五号に「二つの遺影」をいただきました。
この文章は亡き愛妻への思いが切々と語られ
ていてその出会いから最後の看取りに至るま
での委細が語られています。彼は中学・高校
時代ラグビーの選手でその大メシ喰いは「十
ペドン」と云われた程であったとか、その恰
幅のよさは今や御召しの着物で呑み会に現れ
るとほればれするのです。今亡き愛妻への
切々たる思いを読みますと涙が出てきます。
さて人は皆かけがえがありません。今益寄
先生を偲ぶに当って浅からぬご縁をいただい
たことへの感謝と私の妻貞子の亡きあと再び
畏友を失った悲しみと淋しさをあらためてか
みしめているところです。

(炉ばたセイ談庵主)

再びハル・ノートについて

百田 陽一



ところでハル・ノートって何？ 簡単に言うと一九四一年、昭和十六年十二月八日にハワイ・真珠湾攻撃で始まった日米戦争、太平洋戦争の開戦間際に米国のハル国務長官が日本に突きつけた最後通告。その内容を読めば、たとえモナコ、ルクセンブルクのような小さな国でも銃を取って立ち上がるだろうと極東軍事裁判所（東京裁判）でインドのパル判事が表現したことで知られる。正式には「合衆国及び日本国間協定の基礎概略」。歴史研究者たちは「一九四一年十一月二十六日アメリカ提案」と呼んでいる。

日本の傀儡国家、満州国は、当時の日本帝国の存立にとって生命線だった。その満州か

らも撤兵しろ、すなわち満州国を放棄しろという要求は、とてもものめるものではなかった。ところが、ハル・ノートには「china」とあるだけで満州について触れた字句、文言はどこにもないのである。なぜ、中国に満州がふくまれるかどうか確認しなかったのだろう。えっ！そんな基本的な、初歩的なところで食い違いが日米間であったの、と言うやりの場のない思いにとらわれた。じゃ満州が含まれていない、ともし確認されていたらハル・ノートをベースに日米で交渉を継続し、戦争突入は避けられたかも知れない。歴史に「if」は許されないが、ガタルカナルの激戦、アッツ島、サイパン島の玉砕、凄惨な沖縄戦、そして人類史上の汚点と言える原爆使用もなかったかもしれない。……昭和二〇年八月、新生日本になり、七〇年。感無量のものがあります。

（元KKKB専務）

無題



十五代 沈 壽官

日本の陶芸はそのルーツを韓半島に持つ。勿論、更に辿っていくと母なる中国へと至る。

私が何故、『母なる中国』と言うかという
と、韓半島が母の胸から垂れた乳房に見えるからだ。そうすると、日本はさながら母親に添い寝する子供のようにみえる。

事実、古来より実に多種多様な中国の栄養を韓半島という乳房を通して日本は吸収してきた。それらは終着駅・日本に留まり、棄てられることなく、腐らされる事もなく、この最果ての東の島に住む人々によって大切に保存され、磨かれ、活用されてきた。

人類が初めて知った化学と言われる焼き

物も例外ではない。粘土で形を作り、炎をくぐらせる事で固くするという大陸の知恵を学んだ古代人達は、神に祈る器、煮炊きをする器、貯蔵する器、さらには死者を埋葬する棺まで焼き物で作った。『用』の登場である。やがて、技術は、日本の風土の中で、まるで淡水湖に生きる魚の様に静かに進化を遂げていった。そして遂に余計な挟雑物の一切失せた清潔で強い民族の形となっていたのだ。日本で『六古窯』と呼ばれるものがそれだ。越前、瀬戸、丹波、信楽、常滑、備前は、いずれも弥生からの脈々たるルーツである。

その日本陶芸に一大衝撃を与えたのが、豊臣秀吉による朝鮮出兵である。これにより、大量の朝鮮人技術者が西日本に到来した。この時、従来の日本陶芸に無かった二つのものが半島よりもたらされた。一つは『釉薬技術』である。特殊な石の粉と木の灰を混ぜ、それ

を水で溶いた液体を成形を終えた器にかけ高温で焼くことにより、焼けた器をガラスの皮膜で覆うという先進の技術であった。これにより器は堅牢になり、かつ光沢を持った。もう一つは『白さ』である。土を白くしたり、白い釉薬をかける事により、『描ける焼き物』が誕生した。これは日本陶芸のデザインに衝撃的な躍動感を与えたと見えよう。『美』の登場である。

ちなみに、小生の祖先も慶長の役の際、韓国全羅北道南原の戦いに於いて、逃げるに拙く、小西行長旗下の島津軍により捕らえられ、薩摩に連行された陶工の一人である。

しかし薩摩では、捕虜の中でも特別な技を持つ者を厚遇し、その持てる技術の土着化を計った。この辺りが、朝鮮人技術者スカウト説の元になっているようだ。人生と家族を分断され、言葉も通じない侵略者の元へ連行さ

れる悲哀に想いを馳せる事のできない人が残念ながら世の中にはいる。

いずれにせよ、多種多様な朝鮮人技術者達が日本を終いの棲家と決め、日本の土になっていった事が、絢爛たる江戸期の文化の醸成に一役も二役もかった事は間違いない。

韓国には、この時の陶工の日本への大量連行が韓国陶芸の質の劣化を招いたと嘆く説がある。真偽の程は良く分からぬ。ただ、韓半島に於いて、肉体を酷使する職業に就くものを目下に見る傾向があるのは事実である。貴い者は、汗をかかないといった階級意識が古来から根強く存在する。事実、私も韓国の学生に『何故、早稲田大学を卒業しながら、焼き物作りをするのですか？』と真剣に訊ねられた事は一度や二度ではない。彼らは、一流大学を卒業したら、汗をかかない職業に就くのが当然だと考えているようだった。

日本は必ずしもそうではない。腕に寛えの在る技術者に対しては素直に尊敬を寄せる。

相対的価値観と絶対的価値観の相違であろうか？私は祖先を敬うように、家業を敬うている。その絶対的価値観の中に自らを込めたいと考えているだけだ。それは私だけではない。

このように、物作りを取り巻く社会環境の違いは作り手にとっては重要な要素になるであろう。もし韓国の陶芸が劣化したとするならば、日本の連行に加えて、物作りを取り巻く社会環境や物作りに対する人々の意識にも注目すべきであろう。

そこで思うのは、何故日本人はこれ程までに焼き物が好きなのだろう、という事だ。歴史的に見ても異常な程だ。

私は、それは『割れる』という事に起因するのではないかと考えた。割れる事は、即ち死を意味する。

日本は、度重なる天災に幾度となく見舞われてきた。地震、津波、台風、噴火。そして天災はこれからも永遠に我々を脅かし続けるのだ。日本の歴史は正にそこからの復興の歴史と言つていい。地藏菩薩信仰という所の『賽の河原』であろうか。圧倒的な自然の猛威に、繰り返し叩きのめされる中で一つの諦めの境地が生まれる。つまり、無常観である。姿有るものは必ず壊れ、人は必ず死ぬという。日本の文化、芸術は全てこの点に立脚している。割れる焼き物に日本人が惹かれるのは器に『命』を感じるからなのではなからうか。

『海の絆』 岡田哲也

海がへだてるものがある

海がつなぐものがある

海のかなた夢にみるのは 一つの日も

ふるさとの山

ふるさとの川

泣きながら別れた人がいた

泣きながら過ぎた岬があった

だが

わたしたちはシケの日も 凧の日も

土よりもねばり強く

炎よりもやさしい歌をうたい

イバラの波もこえてきたのだ

海をわたる風よ

海をわたる鳥よ

十億万土のあの人に

せめて伝えておくれ

わたしはいまも

おかげで達者であると

どうにかこうにか

達者であると

海のかなた夢にみるのは

一つの日も心のふるさと

帰れないふるさと

海がへだてるものがある

海がつなぐものがある

(ソウル新聞「テソロ」掲載原稿)

ニッポン丸ツアー

江藤 ヤエ子



四月一日。旅の友・中田様と博多バスターミナルで落ち合い、昼食を食べてから、集客場所に博多港中央埠頭に行く。一階の四号室に荷物を置き、十五時に港を離れる様子を見に行くと、波止場では見送りの人たちが手を振っていた。船上からも手を振ってしばしの別れを惜しむ。夕食は七時からだった。

二日は終日航海だった。放送で、

「イルカの群れがいる」

とあり、室を出て見に行く。イルカも船と伴走するのも疲れるのだろう、何時の間にか姿を消していた。

三日。八丈島に着いたのだが、海が荒れていて、船は接岸できず、戻ることになり、島の姿をカメラに収めた。飛行機で行けば上陸できたのと思うことだった。夜はウエルカムパーティーで、服装はインフォーマルである。スプリングコンサートもあった。桂竹丸師匠が落語を演じた。知覧の特攻おばさんの蛍の話だった。終了後、エレベーターで彼と一緒にになったので

「私は指宿から参加しています」

と話しかけると、彼は

「指宿では白水館に泊まりましたよ」

と笑顔が返ってきた。彼は鹿屋出身である。

四日。家島に上陸した。十二時に着いたので、一時から瀬戸内の味覚を楽しんだ。海鮮料理である。家島は播磨灘の沖合いに浮かぶ家島諸島の中の有人島である。複雑な海岸線に囲まれた島周辺は魚の格好の棲家で年中、



八丈島を背景にして（上陸できず残念）



尾道の千光寺

多くの魚介が揚がる。昼食後は迷路のように入り組んだ路地裏を散策した。

夜は、船員たちが演芸をした。「南京玉すだれ」を五名で演じたが、前列右側の男性は竹が思うように動かず、後ろの男性が竹を取り替え直していた。その失敗に客は大笑いした。

五日。尾道一日観光である。先ずは千光寺に行く。「さくらの名所百選」に選ばれている。映画資料館では、小津安二郎、新藤兼人など尾道ゆかりの作品が展示されていた。私は原節子等の写真を懐かしく眺めたが、中田さんは私より二十一歳若いので、

「知らない映画だ」

と話していた。私は現代の俳優たちが判らない。年齢の差だなと感じた。船に戻る。

夜は、サンクスパーティーだった。船員たちがダンスや踊りをして客を喜ばせた。歌手の女性もいてテレサテンの歌を聴かせた。

六日。今日は別れである。十時に中央埠頭に着いた。六階の客から下船するので、私たちは一番遅い組である。十一時過ぎに下船し、バスで博多駅に行く。中田さんは、

「私は五時のバスです」

と言つて、時間待ちは店をぶらつくつと去つて行つた。私は昼食の弁当を求めて、十二時過ぎの特急列車に乗つた。自由席は二号車だったので、そこに移動して弁当を食べた。鹿児島中央駅で指宿線に乗り換える。十四時十四分だった。十五時三十分指宿着。

雨が降り出していたが、タクシーで帰宅したので、濡れずにすんだ。帰宅後、両隣に土産を配つた。「四季のおのみち水道」である。自分にも記念品を購入したのに、どこで落としたのかカバンには入っていなかった。嗚呼残念と思う事だった。

(エッセイスト)

奇跡のなかに生かされる

川涯 利雄



『炉ばたセイ談』平成26年秋号に、自宅と職場の間を歩く往復二時間が至福の時間だと書いた。日ごと変化する道々の花、海に沈む太陽の荘厳な静けさ。昔の人々が四季を発見し、十二か月を発見し、二十四節季の暦を作り、七十二候の暦を作った時の感動に私も推参し、古人と一体になったような喜びを感じたのである。今はアキレス腱を痛めて歩けない。まことに残念。

私を感じた「至福」とは何だったろう。この幸福感はどこから来たものか。時が経つにつれて私に徐々に膨らみ、見えてくるものが

あった。

その頃、一つの小説に出会った。イタリアの作家サンナ・タマーロの『マッテオの家』という小説である。翻訳者の村野幸紀氏から直接、贈呈いただいた本である。すばらしい小説だった。

1 輝く命

一枚の草の葉も、星たちに劣らず仕事をしている。蟻も砂の粒も、ミソサザイの卵も同じような完璧な仕事をしている。アマガエルも至高の傑作。私の手はいかなる機械にもまさる。

全ては光る。鼠も蝶も草も光る。いろいろのものが光る。

何を見ても、新鮮な驚きを感じた。この中に「永遠」というものを感じた。

作家スザンナ・タモーロは自然のあらゆるものは貴重な存在価値を持ち、全てが輝いているという。この文章は神の創造に触れた主人公の驚きと感動を描いたものである。

主人公マッテオは妻と子供を一挙に失つて暗黒の淵に投げ込まれた。妻が運転する車が海に飛び込んだのである。死因をめぐってさまざまな声や妄想に懊悩する日々が続く。

自殺説・他殺説・妻の背信説など様々な声が脳裏にまといつき、彼の心を切り刻む。

精神的荒惨の日々に堪えず、墮落の日々を過ごすマッテオに信仰深い盲目の父の言葉が働き掛ける。

マッテオは放浪の果てに出会った山小屋に籠り、羊を飼い、花々に囲まれた生活を送るなかで、草も木も花々もすべてが輝いていることを発見し、驚嘆する。自身の体も命も

見事な叡智・愛の中で生まれ、生かされていることを発見したのである。この喜びと感激が彼の闇に落ちたたましいを救った。

この時の感激を綴ったこの文章に触れたとき、私が往復二時間歩く中で毎日感じていた「至福」とはこれだったと思った。私は快哉を叫んだ。

2 生かされる

地球と太陽

地球と太陽の距離はまことに微妙、絶妙である。あと一步近づけば焦げ付き、もう一步遠ざかれば凍りつく。そのぎりぎりのところをやや楕円形の地球が24時間かけて自転し、明確な楕円を描きながら365日かけて太陽の周りを公転する。楕円を描いて公転するから春夏秋冬の四季があり、実りの秋も来る。

地球の中心軸はやや傾斜しながら自転し

ている。その傾斜によって、太陽光が地球の隅々に届き、人間や動物・植物、すべての命に太陽の恵みを分配できるのである。

地球自転のスピードはおよそ時速1700キロメートル。新幹線の約六倍から七倍の速さだが音もなく、揺れもなく、我々は振りと落とされることなく、七十数億の人間が地球の表層にそれぞれの形で暮らしている。みごとな地球の仕組みである。

海

この広大な宇宙のなかに何億あるかわからない星の中で、海をもつ星は今のところ地球だけだと学者はいう。この海水はどこからきたのか。

白く長い尾を引いて時々夜空を流れる彗星をわたしたちは知っている。あの彗星が何千万・何億個も地球に打ち込まれて海が出来たという説をNHK特集で聞いて驚いた。丁

寧な解説だったから、少なくとも海水の起源について、これが地学者・海洋学者たちの通説になっていたのであろう。何万もの彗星を地球に打ち込む技を「偶然」と言えるだろうか？ 何か大いなるものの「意志」が働かなくては、そういうことは偶然には起きない。

また、この海水が面白い。1メートルの深さの海水は学校のプール何億個の水に相当するの？ 海洋学者は1年に1メートルの深さの海水が空に蒸発するという。蒸発した水は空中に漂い、冷気に触れて凝集して雲となり、さらに冷えると雨や雪となる。蒸発した海水は一滴余さずもとの海にもどり、一滴も地球外にこぼれない。見事な循環の叡智である。

空から降りそそぐ雨や雪は、山々の植物を育て、大地を潤し、人間の食糧となる稲や野菜を育て、心を癒す花々を育て、多くの動物

の飲み水として命を養う。

照葉樹林の落ち葉に降りそそぐ雨は小さな細菌を育み、細菌は落ち葉を蚕食、解体し、その植物の栄養分と菌は雨に流れて山川に注ぎ、菌は川の濁りを食して水を浄化し、菌は水苔をそだて、菌や水苔を食して鮎などの小魚が育ち、小魚めがけて鯉が急流をのぼり、多くの川の有機体を求めて海から魚群が川をさかのぼる。水は山や川の栄養と共に海に流れて海に栄養をもたらし、その栄養を求めて鯛や鰯が河口にひしめき、河口に人間が住み着いて、街は漁港としてにぎわったのである。

海水は龍のようにならねり、くねり、多くの壮大な海流となつて時に海面に出て酸素を取り込み、海底に潜つて海の生き物に酸素を与える。海流は四千年かけて世界中の海をめぐると海洋学者はいう。

山も海も一つの大きな循環の輪を描いて

つながっている。この壮大な循環の叡智のなかに私どもの命は生まれ、生かされているのである。

人体・命の仕組み・遺伝子などを研究している筑波大学の村上和夫教授は世界的な生命学者だが、人間が生命を得て、この世に生れ出る確率は、宝くじの特賞に連続百万回当たるよりも難しいという。何か、大いなる意志、サムシング・グレイトとでも呼ぶべき大いなる意志なくしては人間としてこの世に生まれ出ることはできない”という。

こうした大いなる意志に包まれて私どもは命を与えられ、生かされている。私は一日に時間の徒歩の中で、この貴重な命をいただいていること、貴重な自然の営みに囲まれて生かされていることを実感したのである。この時間の喜びを「至福」と呼んだのである。

3 表現ということ

先日、奄美に行った。一泊二日の出張であった。帰りの飛行機までの時間を利用して田中一村記念館に立ち寄った。この小一時間の時間が大きな感動をもたらした。

一村の筆は、すべて命がけで奄美の自然にこもる神の命を描いていた。大きなビロウの葉が発する命の呼吸を、繊細に、丁寧に、濃緑の筆で、あるいは黒い墨筆で、大きく強く、しかし、いかにもやさしく描いている。その線を見ていると、一村の呼吸や祈りが磁場のように響いてくる。こころを虚しくして、丹念に打ち込む表現者田中一村の魂が見たものは、物そのものに籠る創造者の意志である。その画をじいっと見つめていると、涙がにじんでくる。

表現とはまさにかくあるべしと思つた。自然の作り出す生命の尊い営みに真向う時、表

現者は人生のすべてを捨ててその尊い命を写すことにすべての力を注ぐ。

こうして描かれたものが芸術の域に達するのだ。一村は全てを捨てて、裸一貫で自然にこもる命を写す。その時の直観の二首。

画布に海老あはれ触角のそよぐなり　もの
に至る目いのちを描く

削ぎ落し世俗のなべて削ぎおとし息のぎ
りぎりの命をゑがく　利雄

作家安倍竜太郎が画家長谷川等伯の生涯を描いた小説『等伯』上・下の中に、等伯が七尾の霧につつまれた松林の情景を描きながら、技、神(しん)に入るすさまじい体験をする場面がある。

まず等伯は、夜明けの寒さに堪えて水垢離

をし、座禅を組み、呼吸を整え、瞑想して心の鎮静を待つ。描きたいという欲さへ捨てて自分の内部に湧きくるものを待つ。

松林に宿る永遠の真・善・美。これをそのまま写す。松林に籠る御仏の息吹を画布に移す。そのことにすべての力を注ぐ。

こうして一気に筆を執った等伯は、うごめく霧に包まれて見え隠れする松林の風景を、自然の呼吸を、霧の動きを描きに描き、写しに写す。夢中で描いて三日三晩、ものに憑りつかれたように描いて等伯は倒れて、昏睡に陥る。

こうして四百年以上昔に描かれた等伯の国宝『松林図』は完成した。見る人をそのまま曼荼羅のなかに誘う力がおのづから籠る名画はこうして生まれたと作家安倍竜太郎は書く。

作家の想像力も筆も、まさに神に入ったと

いうべき見事な小説である。

私は短歌を創る。小さな日々の感情に埋没した歌をあくせくと詠むのはそろそろやめべきだと感じている。歌はもつと、命の輝きを、生きる喜びを、自然の美しさを・・・つまり、壮大な宇宙の営みに通うような深い呼吸と、そこに包まれて息づく命のよろこびを歌うべきではないかとこの頃考える。

(歌人、華短歌会前代表)



入来薪能と母

串田 久子



長野生まれの母が早稲田大学の在学中に恋愛結婚して、大学卒業後もずっと東京暮らしとなり、父の退職を期に父の郷里である鹿児島薩摩の入来町に根を下ろしたのは、たしか平成六年だった。今は薩摩川内市になったが当時は薩摩郡入来町といい、父の実家はその町の浦之名という地区にある茅葺門屋敷だ。

父の祖霊の地である古い武家屋敷の石垣が残った美しい町並みを母はたいそう気に入り、姑の世話をしながら愛する父と仲睦まじく暮らしていたのだが、入来町に住んで五年目の夏の終わりに、町お

こしのためだと言って、入来の清色城跡の小学校の校庭で薪能を自分を中心となつて開催してしまったのには、流石に娘の私も驚いたものだ。しかしながら母のその発想と情熱は何処から湧いていたのだろうかと考えてみると、突き詰めればそれは母の深い『愛』から生まれ出たのだといえると思う。

歴史ある茅葺門の家を愛し、古い石垣を愛し、清色城の名残があちこちにある小学校周辺を愛し、この素敵な町並みを是非全国に紹介したいという強い願いは、父への深い愛に繋がっていると私は思うからだ。

夫の郷里をこれほど愛して、町おこしをしたいと願う妻がいったいどこにいるかしら。本当に父は幸せ者だったと今更ながら思うのだが、その母は平成二十二

年に第七回の入来薪能を終えた翌年の春、残念ながら事故で急死してしまい、長年頑張つて続けてきた入来薪能も永遠に幕を閉じた。

長女の私は母に頼まれて薪能当日の司会をするために香川からいつも駆けつけていたのだが、母を支えてくださった町おこしに熱心な方々を上手に束ねて動かしていたのは、やはり地元で育った父の役割だったように思う。

このように両親の熱心な想いで実現化した薪能だったのだが、これは母の早稲田の同級生に観世家の娘の春江さんがいて母と交流があったからに他ならない。春江さんからのご紹介で、東京在住の頃から能の重要無形文化財指定保持者である若松健史先生に両親は謡曲を習っていたご縁で、若松先生がご自分の一座を率

いて入来で薪能を上演してくださったのだが、この観世流の能舞台は能には素人の私が観ても鳥肌の立つような心から素晴らしい荘厳な舞台だった。

夕暮れから篝火を焚き、美しい鼓の音が響く中を夢の世界から現れ出たような幻想的な舞が謡と共に舞台の上で繰り広げられていた。

太陽が完全に沈み、深い闇の中から篝火に照らされた『能』という伝統文化がこれほど厳かで心が洗われるものだということを、私は入来薪能で初めて知った。入来薪能の開催からしばらくして鹿児島にも能楽堂が出来たと聞いた。この素晴らしい日本の伝統文化が鹿児島に根付き、いつまでも愛されることを天国の母は願っているのではないだろうか。

鹿児島県人七士の墓

― 歴史を訪ねる旅 (4) ―



下土橋 渡

政府軍の城山総攻撃によって西南の役が
終結したのは、明治一〇年（一八七七年）九
月二十四日のことでした。今年も九月二十四
日がやってきますが、西南の役後、国事犯と
して収監され、獄死した薩摩藩士七人の墓が
宮城県仙台市にあるというのは驚きでした。

そうした史実は学校で教えてくれません
から、著者が知ったのは、恥ずかしながらほ
んの数年前のことでした。旧薩摩藩領内の焼
酎文化の遊びであった『なんこ』のことをイ
ンターネットで調べていると、宮城県仙台市
在住の方のブログに行き着きました（こうい

うのをネットサーフィンといいます）。そのブ
ログに、『鹿児島県人七士の墓』のことが書い
てあったのです。

西南の役に従軍して投降した薩摩軍兵士
たちは、長崎で裁判を受け、約二七〇〇人が
北海道を除く全国の監獄署に配置されました。
仙台の監獄署には、西郷隆盛の叔父・椎原国
幹ら三〇五人が送られ収監されました。うち
十三人が病死。六人は遺族に引き取られます
が、残り七人の墓が仙台市内の瑞鳳寺に残さ
れ、一九七〇年代に七士の墓保存会として、
『みちのく宮城鹿児島人会』が発足し、墓
が整備され、毎年墓参が続けられています。

いつか訪ねてみたいと思っていたので、平
成二十二年（二〇一〇年）三月の、六十歳定
年退職の記念を兼ねた山形・仙台への旅の旅
程にさっそく瑞鳳殿を入れました。仙台藩主
伊達政宗、忠宗、綱宗公の廟所である瑞鳳殿

は、仙台駅で観光周遊バス『るーぷる仙台』に乗って約一〇分後『瑞鳳殿』で下車するとそこが参道入口です。両側に杉木立が並ぶ石造の広く長い急勾配の坂道を登っていきます。もちろん観光ガイドに七人の墓は載っていませんが、瑞鳳殿へのメインストリートである参道沿いにありますからすぐ目に付きます。

仙台に墓がある七士

土岐丑之助	明治十一年没（二十五歳）
長井弥藤太	明治十一年没（四十七歳）
寺田泰介	明治十二年没（三十三歳）
有馬儀定	明治十一年没（二十三歳）
橋口仲二郎	明治十二年没（三十六歳）
米良佐平太	明治十二年没（四十歳）
有馬純俊	明治十一年没（二十五歳）



瑞鳳殿への参道と鹿児島県人七士の墓の案内板



鹿児島県人七士の墓

薩摩藩士は、西南の役だけでなく、戊辰戦争でも宮城と戦いましたから、監獄署も処遇に苦慮したことでしょうが、監獄署長たちは、国事犯を待遇よく、温かく迎えました。西南の役では勝者となりましたが、戊辰戦争では敗者だった東北の人たちは国事犯の気持ちがかかっていたに違いありません。

国事犯たちは、東北の人たちの厚情に報いるため、権原らが中心となって宮城県に対し、不毛の地を開墾して朝恩に報いたいという『開墾奉願書』を提出し、開墾奉仕を願います。国事犯たちは、仙台、塩釜、野蒜、雄勝で、開墾作業や築港工事などに従事してよく働き、疲弊していた宮城県の開発に大きな役割を果たしました。

やがて刑期を終え、薩摩兵士たちは故郷鹿児島に帰りました。なかには仙台に残る人などもいましたが、故郷に帰れず病死したもの

もいました。椎原はその人たちの永代供養を瑞鳳寺にお願いしたのです。それが七人の墓です。

一方、西郷ら西南の役に敗れた薩軍二〇二三名もの将兵が眠っている鹿児島市の南洲墓地には、鳥居をくぐったすぐ左手に招魂碑が建ててあつて次のように刻まれています。

招魂碑

明治一〇年西南の役の事に由り宮城県仙台をはじめ全国各地に幽囚中死歿された人が少なくない。本年恰も南洲神社八十五年祭にあたりその記念事業の一つとしてこれら諸氏の招魂碑を同士の英霊眠る南洲墓地境域に建ててもつて慰霊の誠を尽さんとするものである

昭和三十七年九月二十四日

南洲神社八十五年祭奉賛会



招魂碑（鹿児島市南洲墓地）

この招魂碑の裏には十二名の名前が記してあつて、うち七名は仙台で、五名は宇都宮で死んだとあります。南洲墓地に建てられているこの碑は、国事犯として収監され、獄中病死した人たちの鹿児島に帰りがたかつたという願いをかなえたものに他なりません。

（元九州職業能力開発大学教授）

中津隊、増田宗太郎

― 歴史を訪ねる旅 (5) ―



下土橋 渡

平成二十六年（二〇一四年）の正月は、長男家族も次男夫婦も帰省できないというので、大晦日から、次男夫婦の住む福岡県内のホテルに宿をとって過ごしました。明けて元旦は、連れ合いと次男夫婦たちは福袋を目当てにデパートへ買物。そこで、著者はひとり別行動をとって大分県の中津を訪ねました。

中津城は黒田官兵衛が築城を開始し、細川忠興が完成させた城です。折しも、その年のNHK大河ドラマは『軍師官兵衛』だということで、幟があちこちにはためいていました。

また、中津は福沢諭吉が幼年期から十九歳ま

でを過した地です。そして、中津城には、増田宗太郎が組織して西南の役に従軍した中津隊の碑があります。中津への小旅行は、その歴史を探る旅でもありました。

一、福沢諭吉

勝海舟が艦長を務める咸臨丸に乗り込んで、福沢諭吉が、ジョン万次郎らとともに渡米したのは、万延元年（一八六〇年）、福沢二十五歳のときのことでした。七年前の嘉永六年（一八五三年）には、ペリー提督の率いる黒船が浦賀に來航、七年後の慶応三年（一八六七年）には、第十五代将軍徳川慶喜が政権を朝廷に返上する、いわゆる大政奉還が行われるという、まさに、明治維新へ向けての幕末の混乱期のまったただ中でした。

帰朝後、福沢は幕府の外国方に雇われます。以後、ヨーロッパ諸国も歴訪し、社会の制度や考え方などに旺盛な好奇心で見聞を広めま



福沢諭吉旧居（中津市）

した。その後、『西洋事情』『学問のすすめ』『文明論之概略』など多くの著書をつつと出して、当時の日本人に西洋文明の精神を伝え、わが国の民主主義思想の普及に大きな影響を与えました。

この福沢諭吉が、兄三之助のすすめで蘭学を学びに長崎へ出る十九歳までの幼年期を過ごした大分県中津市に旧居が残されていて見学することができます。旧居内には、立て札が立てられ、旧居にまつわるエピソードがいくつか紹介されています。その一つが『刺客に狙われた話』です。

刺客に狙われた話

明治三年一〇月、母と姪を迎えに中津に帰った時の事です。中津の若い藩士のかなには、諭吉を西洋かぶれと嫌い暗殺しようとする者がいました。その動きを察

知した服部五郎兵衛（福沢家の親戚）は夜福沢家を訪問し、いつまでも酒を飲みながら夜中の1時を過ぎても話し込んでいたので、諭吉が寝入るのを狙っていた刺客はその機会を逃し、諭吉は命拾いをしました。（旧居内の立て札より転載）

二、増田宗太郎

このエピソードに登場する刺客こそ、のちに中津隊を組織して、西南の役へ従軍する増田宗太郎（一八四九〜一八七七年）でした。増田は、中津藩下士増田久行の嫡男として生まれます。母は九州国学の三大家の一人で、平田篤胤直系の弟子である渡辺重名の娘。父は儒学者・福沢百助の妻のいとこですから、福沢諭吉とは再従兄弟の関係にあり、家も近くにあります。渡辺重名の孫の渡辺重石丸が始めた国学塾に入門し、平田篤胤派国学を



『西南役中津隊之碑』の大顕彰碑（中津城公園地内）

学び、尊王攘夷思想に開眼します。明治三年（一八七〇年）、上京して政府の文明開化・開国和親の方針を確認した増田は、維新政府に幻滅と深い憎悪を抱きました。

時代の文明開化のリーダーは、再従兄弟の福沢諭吉。諭吉への不満を募らせた増田は同志と暗殺計画を企てます。明治三年に諭吉が帰郷した際、寝込みを襲おうと福沢邸に乗り込むものの、諭吉は来客した服部五郎兵衛と夜通し飲み明かしたためこの計画は失敗し、逆に諭吉に心服し、そのまま藩邸の慶應義塾に入学することになりました。

明治七年（一八七四年）に佐賀の乱が勃発すると、中津士族を統合して数百名を集めて部隊の編成に成功し、江藤新平に合流しようとして佐賀に赴きましたが、増田らが到着したとき、乱はすでに鎮圧されていました。

帰郷して中津に自由民権運動の結社を設

立。板垣退助が林有造を送って祝したともいわれます。村上田長によって、自由民権・主権在民を掲げた『田舎新聞』が創刊されると編集長を務めます。

三、西南の役

明治一〇年（一八七七年）に西南の役が勃発すると六十四名で中津隊を結成し、三月三十一日蜂起。中津支庁や大分県庁を襲撃し、四月五日熊本県の阿蘇郡で西郷軍に合流、中津隊は以後各地に転戦。増田は最後まで西郷隆盛に付き従い、最後は鹿児島城山の戦いで戦死したとも、捕えられて斬首されたともいわれます。享年二十八。

司馬遼太郎は、著書『翔ぶが如く』（文藝春秋）で、「中津隊の首領増田宗太郎については、触れるべきことが多い」と書いています。



薩軍最後の軍議（西郷隆盛宿陣跡資料館（宮崎県延岡市児玉熊四郎宅））



西郷隆盛宿陣跡資料館から見上げる可愛岳

西南の役最後の激戦『和田越の決戦』（宮崎県延岡市）において敗れた西郷隆盛は、翌日の明治一〇年八月十六日、薩軍に解軍の令を出します。官軍が包围する可愛岳を突破して山中を彷徨中、三田井（宮崎県西臼杵郡高千穂町）に達した頃、増田は中津隊の残存者につきのように告げます。

『薩軍は鹿児島にむかう。われわれ中津隊の役目は済んだ。ここから北すれば、故郷の豊前へ帰ることができる。誰彼よ、ここから中津へ帰れ。』

すると、中津人たちは、増田だけ薩軍にとどまり、他に対しては故郷へ帰れというのは道理にあわないと、そのあいまいさを衝いてきました。そこで、増田は、『自分は諸君から選ばれて隊長になった。隊長になると、自然、西郷という人格にしばしば接した、諸君は幸いにも西郷を知らない、自分だけがそれを知

ったが、もはやどうにもならぬ』といい、たちまち涙を流します。増田宗太郎が、このときいった言葉が中津の人々に記憶されているといえます。

吾（われ）、此処（ここ）に來り、始めて親しく西郷先生に接することを得たり。一日先生に接すれば一日の愛生ず。三日先生に接すれば三日の愛生ず。親愛日に加はり、去るべくもあらず。今は、善も悪も生死を共にせんのみ。

四、天賦人權論

肥後国荒尾村（現熊本県荒尾市）に生まれた宮崎八郎（一八五一〜一八七七年）という人がいました。ルソーの『社会契約論』の部訳である中江兆民の『民約論』に影響を受け、自由民権運動のリーダーとして、明治八

年（一八七五年）、熊本県植木町に『植木学校』を設立します。西南の役が勃発すると、民権家同士と『熊本協同隊』を結成し、薩軍に合流。桐野利秋のもとでも政府軍を相手に戦いますが、志半ばで熊本県八代市にて戦死しました。享年二十六。

増田宗太郎と中津隊が薩軍に参加したのは、薩軍が田原坂を敗退して形勢が悪化してからであり、薩軍の敗勢を十分に知りつつの参加でした。そして、増田は募兵において、『人民天賦の権利を回復し』と書いて檄を飛ばしたといえます。

司馬遼太郎は、『翔ぶが如く』に、「熊本協同隊がルソーの民約論を聖書としたような徹底性はなくとも、福沢仕込みの英国風の天賦人権論は増田の脳裏にあったに相違なく、この点、士族の権益の回復をねがうエネルギーとは別趣の思想をもっていたといっている。」

と書き、「福沢は、反対党を許さない政権をかれの近代思想の立場から憎悪した。その意味で西郷と西南の役を大きく評価し、そのなかに増田以下の中津士族がいたことになっても満足した。」と書いています。

鹿児島市の南洲墓地に『中津隊士之墓』と『増田宗太郎墓』があり、大分県中津市の安全寺にも増田宗太郎の墓があります。また、中津城公園地には、水島鍊也（中津出身、神戸高等商業学校（神戸大学の前身）の創立者）によって『西南役中津隊之碑』の大顕彰碑が建てられています。

（元九州職業能力開発大学教授）



西南の役薩軍戦士菩提寺の事



宮下 亮善

松峰山無量寿院浄光明寺は、西南の役薩軍戦士の菩提寺である。

『岩村県令記念碑』に、

明治十年九月二十四日城山陥ルヤ、鹿児島県令岩村通俊、予メ参軍山県有朋・川村純義ニ請ヒ、墓域ヲ此ノ地ニ定メ、川村参軍ニ聞キテ、西郷隆盛ヲ中心トシ、三十九人ノ順位ヲ定メテ葬ル。是ノ日県令属僚ヲ率イ来リ、隆盛ハ長持ニ納メ、其ノ他ハ毛布ニ包ミテ葬ル。自ラ筆ヲ執リ、各姓名ヲ記シ、木標ヲ建ツ。実ニ戦塵ノ渦中、礼ヲ厚クシテウメタルハ、英霊正ニ感動セシナラン。此処ヲ泉岳寺

義士墳域ニ倣ハント期セシモ、果サスシテ転任ス。

時の鹿児島県令岩村通俊は予め参軍山県有朋（陸軍中将）と参軍川村純義（海軍中将）に事前に願ひ出て、西郷隆盛以下、諸将の遺体を浄光明寺に埋葬しこの墳墓の地を赤穂義士の眠る芝高輪の泉岳寺にしたいとの深い願であつた。

この記念碑は、岩村県令の遺徳を顕彰するために、昭和十七年九月に建立されたものである。岩村県令は、高知県の人で、累進して農商務大臣になり、華族に列せられ男爵を授けられた。題字は西郷従道公の次男従徳侯が揮毫したものである。

現在、南洲墓地として広く喧伝されているが、元はといえは、浄光明寺の境内に南洲翁以下、西南の役薩軍戦士は葬られたわけである。明治初年（一八六八年）三月に神祇事務

局は『神仏判然令』を公布し、「廃仏毀釈」を断行した。藩内の寺院はすべて廃止され、明治九年の『信教の自由の布達』まで仏教寺院は存在しなかった。

薩摩、大隅、日向には、およそ一六〇〇ヶ所の寺院と、およそ二九〇〇人の僧侶がいたが、二年の間に寺領は没収され、僧侶は還俗させられた。この浄光明寺も、その例に洩れず廃寺の憂き目に遭ったわけである。それは明治政府の祭政一致の国策によるものであった。

岩村県令の志しは、南洲神社として、神道の祭式に則り、その御霊の慰霊が執り行われ今日に至っております。

そもそも、浄光明寺は弘安四年（一二八四年）創建され、ご開山は第三世宣阿上人にて、島津初代忠久、二代忠時、三代久経、四代忠宗、五代貞久、二十一代吉貴公の菩提寺で、



南洲翁位牌 製作者：高山学（八女市）

寺領四〇〇石、七三〇年の歴史を有する薩摩の名刹である。

「薩英戦争」における英国艦隊の砲撃、「廃仏毀釈」「西南の役」など、大きな時代の波に翻弄されて来ましたが、現住職で四十二世の法脈を保って今日に至っている。南洲翁の法名は『南洲寺殿威徳隆盛大居士』といい、西郷従道公の次男従徳侯が昭和十九年に人吉の永国寺に位牌が安置されましたが、平成

二十一年九月二十四日南洲翁一三三年忌に、本来あるべき浄光明寺のご宝前に安置されました。また、同時に『明治十年薩軍官軍戦没者之霊位』としての位牌も安置し、敵味方の区別なく回向されている。

◆永野九兵衛の実話

現在の西郷さんの墓地の辺りが、寺の本堂の遺跡かと聞いていましたが、明治十年前までの寺は、本堂なんぞ言う建造物はなく、本堂の跡の背後に面した所に隠居寺が在ったことを覚えていきます。現今の、南洲神社の所在地より、少し西に当たる処に忠久公の祠堂がありました。官軍は、寺の前に高さ三尺許りの防塁を築き、悉く境内の墓石を以つてした。

九月二十四日の朝、私が戦況を見ていた時だったが、官軍は、寺の前に四斤半の大砲を二門据えて、私学校を砲撃しました。

隆盛先生の遺骸は、山籠に入れられて浄光明寺境内に運んで来ました。その日の先生の服装は黒服を被つておられたのであったが、遺骸はそのまま長持ちに納めて、先生の木像の在る所より、少し背後のあたつて高い所がございました。そこに間もなく埋葬になりました。その後でしたが、丁度、午後一時の頃、官兵が先生の首を新しい手拭きで包み、それを提げて来ました。それより、菓研帽子を被つていた官軍の大將でしたでしょうか、氏名は何という人であったか知りませんが、青の大將が屈んで首実験を行いました。当日この光景を見に来ていた付近の人たちは沢山でした。

◆肝属ヨシ子の実話

当時の浄光明寺の六月灯の日は、士分格の男は五ツ紋付羽織、袴、女は紋付羽織を召し

て参詣するのが慣わしとなっておりました。明治維新までの浄光明寺の建物はとても宏大なものでありましたが、維新直後に壊されてしまいました。明治十年役の当時は、只今の公設市場付近（山下町）より、官軍が城山を攻撃しました。あの折、浄光明寺の墓石は官軍が、浄光明寺前の一帯に台場を築き、寺の下より、各町内に到るまで、竹籠の大きなものを置いてございました。それぞれ、廻りが六尺位あった。その中に土砂が入れてあった事を、今でも、記憶に存じております。

◆岩村通俊県令の談話『南洲神社沿革概要』昭和八年刊行

城山の落ちた日は、前から総攻撃のあることは知っていました。愈々終局になると思うたので、かねての考え通り、参軍に請うて西郷さん始め戦死者の遺骸は、此の方に貰い受

け葬ることになりました。戦いの終わったのを聞くと、早速浄光明寺の岡の墓地に行ってみました。そうすると重立つ人々の遺骸は、ここに持ってきてあつて、西郷さんだけは大きな長持ちに入れ、桐野だの別府だのは、死なれたままの体をそのまま雨がりの地の上に横たえてありました。たしか桐野さんは赤いフンドシか締めて棕櫚の毛でこさえたワラジを履いておられたようで、如何にも覚悟の様子があらわれていました。その日はひどく雨の降った後ではあるし、陸軍方には人足なども十分に用意が整っています。けれども、私の方には何も無いので、大いに困りました。が色々心配を連れて参って、それぞれ手当をしました。また陸軍の方に頼んで、毛布を譲って貰い、それでひとつひとつ遺骸を包んで葬りました。つまり追々は四十七士の墓みたいにするつもりで葬りました。人々の身分

（のことなどは、川村（参議純義）さんに聞いておいたので、それぞれ次第を定めて葬りました。かえすがえす混雑の際ですから、遺骸を取間違えるような事でもあつてはならぬと思ひまして、一々私自ら名を書きつけて印しをしたのであります。

けつをしす
辭 闕

独不適時情

独時情に適さず

豈聴歎笑声

豈歎笑の声を聴かむや

雪羞論戰略

恥を雪がむとして戰略を論ずれば

忘義唱和平

義を忘れて和平を唱う

秦檜多遺類

秦檜遺類多く

武公難再生

武公再生難し

正邪今邦定

正邪今邦ぞ定まらむ

後世必知清

後世必ず清を知らむ

「自分一人だけ時勢に合わず、意見が用いられなかった。どうして反対派の人々の歎び笑う声に耳を傾けておれようか、いや聴くにたえない。武公岳飛が金に進攻された宋国の恥をそそぐ為防衛反撃の戰略を論ずると、正義を忘れて金と和平を唱えた売国奴の秦檜、その残党のような者共が多く、武公のような忠臣はもはや再び世に出にくくなった。このたびの朝鮮問題はどちらが正か邪か今どうして決まろうか。決められることではない。後の世の人々は必ずどちらかが清く正しかったかを知るであらう。」「」は他の文献引用。

この『辭闕』は、所謂、征韓論争に破れ下野した明治六年十月に詠んだものである。南洲翁は自信を岳飛になぞり、大久保派を秦檜にたとえて非難している。明治維新は、欧米列強からの植民地支配との必死の戦いであつ

た。この後に台湾出兵、江華島事件など、昭和二十年（一九四五）の大東亜戦争敗戦までのおよそ七十年までの「分水嶺」が、明治六年の政変であったといえる。

与謝野晶子が詠んだ「御仏の浄光明がとこしえに 護るならまし 南洲の夢」

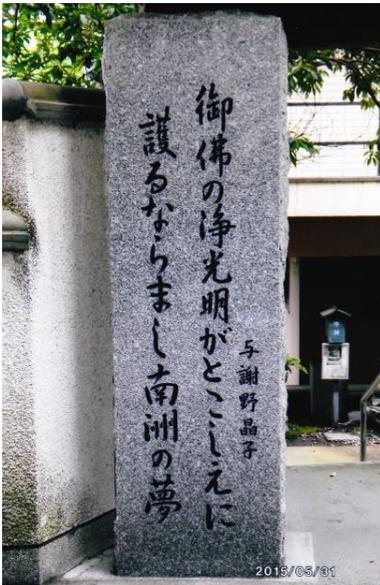
その「南洲の夢」とは、「後世必ず清を知らむ」とは、今日の東アジア情勢を俯瞰する時、また、中国の南シナ海への国際法無視の蛮行を思うと非常に暗示的である。

浄光明寺門前に建立された歌碑は、昭和四年に南洲翁の墓前に与謝野晶子が鉄幹と参詣した折りに詠んだものである。その建立の趣旨は、南洲翁以下、西南の役戦士の菩提を弔う事と、菩提寺としての証しを後世に継承するという願いが込められたものである。

その除幕式と西南の役薩軍戦士の菩提を願う法要が、平成二十五年九月二十三日に当寺

にて、遠くは北海道、東京からも南洲翁を慕う多くの方々が参集され、西南の役後一三七年ぶりに、第四十二世村上正空導師のもと厳かに執行されました。

西南の役は、かつて郷中教育で学びあった仲間同士が敵味方に別れて戦うという悲劇。近代国家建設途上の中、惜しみてもあまりあるものがある。



歌碑 揮毫者：下尾恵美子

御仏の浄光明がとこしえに

護るならまし南洲の夢

— 与謝野晶子 —

先生のうしろ左右にならぶなり

若き隼人の山の墓さえ

— 与謝野鉄幹 —

濡れぎぬをほさんともせず子ともらの

なすがまにまに果てし君かな

— 勝 海舟 —

打つ人も討たる人も味気なや

同じ御国の人と思へば

— 勝 海舟 —

(天台宗大雄山 南泉院住職)



浄光明寺（南洲墓地）に建立されていた南洲堂。大東亜戦争末期の鹿児島大空襲で焼失した。上野の西郷像の原型で高村光雲作の木像が安置されていた。明治32年2月22日建立・昭和20年7月31日焼失。

茶わん虫のうた



中山とし子

表題の唄は、鹿児島県人にはなじみの郷土歌（俗謡）である。「県の特産品」と言って良いかも知れない。内容はよく知られている通り、「茶碗蒸し」と「茶碗虫」の意味の行き違いを、鹿児島弁の面白みに乗せて、軽妙で親しみやすく調子をつけたものである。歌詞のおかしさ、曲の素朴さ、愛唱しやすさ、覚えやすさから、県人に愛され面白がられ、小さい子でもすぐに覚えてしまう。練習したわけでもないのに、何十年経つても忘れないところが不思議だ。作者は、大正末、現在の霧島

市にある宮内尋常高等小学校の教師であった石黒ヒデという人だそうである。

今回、私はこの唄の文法的解説という暴挙に挑戦した。恐らく、鹿児島県広しと云えども、俚言りげんの文法的分析という、無粋で徒勞とも見える仕事をされた方はないのではなからうか、という想定の下、元日本語教師の経験を生かして、敬愛する「茶わん虫のうた」に向っていったのである。私にとって、これは思ったよりも楽しい時間であった。もし、以下の解説に納得のいかない県人（賢人）がおられましたら、どうぞご一報くださいませ。共に、より良い鹿児島弁の歴史と保存に知恵を絞ってまいりましょう。

説明の都合上、行数を①②③・・・、という風に、番号で判別しながら解説する。

茶わん虫のうた

- ① んーだもこーら いーけなもんな
- ② あーたいげーの ちゃわんなんだ
- ③ 日に日に三度も洗(あれ)もんせば
- ④ きれいなもんごわんさー(どー)
- ⑤ 茶碗についた虫じやるかい
- ⑥ めごなどけあるく虫じやるかい
- ⑦ まこてげんねこっじゃ わっはっは

【解説】

- ① んーだもこーら いーけなもんな

「(う) んだも」は、「(う) んだもしたん」の後半を省いた形の感嘆詞である。びっくりしたときに「んだも!」、と無意識に口を吐いて出た後で、「あん人が交通事故に遭いやつたちな!」という具合に続く。単なる驚きでなく、「ありそうもない」「信じられない」と、

先ず否定してかかる大袈裟なニュアンスを含んだ心情を表す。

「(う) んだもしたん」の語源を辿れば、

『鹿児島方言大辞典』(橋口満著 高城書房)

には、「ウヌダチモウシラヌ(己達・知)の転訛」とあり、これに従うと、「(う) んだ」は、

「私(たち)」、「も」は「もはやこれ以上は

・・・ぬ」と使うときの副詞「もう」。「知た

ん」は「知らん」の転音なので、直訳すれば、

「私は、もはやこれ以上の事は知らない(聞いたこともない。それくらいびっくりだ)」と

なるが、今やこれはかけ声のようなもので、

びっくりたまげたときの慣用表現化している。

「んだ」は「(う) んだ」の「ウ」が音声

的に脱落したもので、「うんだもしたん」が語

源的には正しいのであろうが、早口で言うとき

には、唇が「ㄷ」の音を怠けて落してしまう

ので、意味が通れば結果的に「ンダ」となる。

「うんだ」は、元々は、[wunɔdati]の鼻音「ヌ」が後続の「ダ」^{da}と合一し、「(ウ)ンダ/unda」になったものであろう。/ɔ/と/a/は、調音点(音を作る舌の位置)が歯の裏側の同じ位置にあるので、舌が「ヌ」^{nu}と「ダ」^{da}の二回働くところを怠けて一回にはしよった形である。語末の「チ」^{ci}は、無声化しやすいので脱落したものと思われる(註一)。

以上のように、「ウヌ」が「ウン」となり、「ン」にまで省略短縮されたと考えられる。「ン」に変えて発音する(なまる)ことを「撥(はつ)音化」と言う。

「んだもしたん」を運用の面から見てみると、「びっくりたまげた」というニュアンスを含みつつ、普段は、「んだも!」「んだもしたん!」、と結構軽いノリで使っている。大したことではないのに、「んだもしたん」といかにも大したことのように言いたがるのが鹿児島

県人の特徴である。本当に驚いたときには、「んーだもしたん」と、「ん」を伸ばしてしまふ。又、「んだもしたーん」と「た」を伸ばして感嘆(哀悼、共感、抗議、感動・・・等)の意を伝えたりする。イントネーション(音の高低)やプロミネンス(ある部分を強弱をつけて発音したり伸ばしたり縮めたりして、ある意味合いを付け加える)を駆使することで、吉凶どちらにも、どんな意味にもなる慣用句である。

もし、友人が百万円の宝くじに当たったなら、「んーだもしたーん!」とでも言うであろう。時には、「んだも、んだも、んだも!」という具合に急ぎ騒ぐこともある。鹿児島県人は表現力が豊かであるために、大げさな言い方を好むように思う。

ちなみに、英語の“OH, MY GOD!”と大変良く似たニュアンスである。

英語方は、「この表現に見合う日本語が見当たらない」、等と悩んでおられるようだが、「んだもしたん！」を知らないからであろう。「こーら」は、「これは」を短縮した言い方で、調子を取るためのかけ声の役目である。鹿兒島弁の最大の特徴は、「短縮する」というところにある。

「いけなもんな」は、「どうしたことでしょうか」であり、「いけな」は元々は、「如何様な」であろう。「いけな/ikena」は「いけん」と撥音化した形でも使う。「どう、どんな、く？」の疑問詞と思えば良い。「いけな顔?」、「いけな人?」、「いけな理由で?」、「いけんしたと?」＝「どうしたの?」の如し。

②あーたいげーの ちゃわんなんだ
「あたいげー」の「げー」は、「家(うち)」のこと。従って、「あたいげー」は、「私

のうち」。同じように、「おはんげー」は「あなたのうち」、「あん人げー」は「あの人のうち」を表す。

「ちゃわんなんだ」の「なんだ」は、「等」の転音であるが、これは「複数」の意味と、「茶碗」という対象を話題に取り上げ、以下の陳述につなげるための働きを持った接尾語の二つの捉え方ができる。籠に伏せてある茶碗はたいてい複数だから複数形と捉えたいかなるかもしれないが、ここは、その語を主題(話題の主。文中の主人公と考えても良い)とする働きのある接尾語と考えた方が良いと思う。「茶碗」に「なんだ(等は)」をつけることで、話し手が茶碗に何らかのこだわりがあることが表現される。例えば、「あたいげんしなんだ」は、自分の夫に対して妻たちがよく使う言い方である。「あたいげん」の「げん」とは、「げーの/geheno」が短縮し、最後が

「の\ndo」と鼻音であるために、「げん」となま
 ったものである（註二）。「し」とは、「人」の
 こと。従つて、「わたしのうちの（げん）人」は
 、すなわち「自分の夫」を指すので、これに
 「なんだ（等は）」を付けても複数の意味には
 ならない。ここは夫に「なんだ（等は）」と、
 物にでも付けるような接尾語を付けることで、
 主題となる夫から少し距離を取り、ぼかして
 客観化する作用がある。言外に妻の微妙な気
 恥ずかしさやこだわり感が表現され、文末の
 感情を含んだ陳述に繋がっていく。

例… あたいげんしなんだ（うちの主人た
 ら）、昨（よ）夜（べ）は酔（よ）食（く）ろて（酔っ
 ぱらって）良か気分じゃしたが（でしたよ）。

（断定・不満）

話し手の性別や、話し手と話題の物や人と
 の親疎上下関係、話し手と聞き手との親疎上
 下関係により、「なんだ\なんか」と使い分け

るが、いずれも、「○○なんだ」の「○○」を
 主題として、ある感情の下に文末の陳述につ
 ながっていく役割があるようだ。従つて、「あた
 いげん茶碗なんだ」|| 「うちの茶碗といった
 ら」「うちの茶碗でしたらねー」と、「茶碗」
 を主題として、話し手が何か述べようとして
 いる気持ちが表現される。聞き手に改めて注
 意を向けさせ、その後で主題の説明のある感
 情の下に陳述する文となる。陳述のことをモ
 ダリティと言う。つまり、「○○なんだ」とき
 たら、文末には、話し手の「意思」「推量」
 「断定」「判断」などの心的態度や、「悩み」
 「不安」「怒り」「確認」などの気持ちが表れ
 る形式の文となることがわかるわけである。

例… うちのすったれ（末っ子）なんだ、

いっちゃん（全然）勉強をせんで、こら（こ
 れは恐らく）、高校も危うかとじゃなかるか
 い。（推量・不安）

③ 日に日に三度も洗(あれ)もんせば

「日に日に」は、「毎日」の意味だが、「日に日に」とあえてくり返すことで、くり返し継続している意味合いを強める。「毎日」＝「めーひに」という言い方もあるが、「日に日に」の方がやや大げさな表現となると同時に、唄のリズムとしても良い。

「洗もんせば」は、「洗ひ」＋「申(まう)せば/mauseba」の母音 [au] を、「オー/ɔ:」と発音する現象(開音)のため、「洗ひ申(もー)せば/araino:seba」(註: [ɾ/hi] は、ほぼ「イ/ɪ」と発音されるため、便宜上 [ɪ] と書く)とまず長音変化し、同時に [arai] の [ai] が [e] に転音同化(註三)し、「洗/are/あれ」と発音される。更に調子を取るために「洗(あれ)もーせば」から「洗(あれ)もんせば」と、最終的に撥(はつ)音化したものであろう。俚言

の特徴として、舌や唇が怠ける結果、語を引き伸ばしたり(長音化)、詰まったり(促音化)、撥ねたり(撥音化)を多用するということがある。

④ きれいなもんごわんさー(どー)

「きれいなもん」は、「清潔なもの」。「ごわんさー」は、「御在す」「御座す」に、強意を示す終助詞の「さ」をつけ、断定的表現をしたものである。文頭に「茶碗なんだ」ときだから「ごわんさー」と「断定」の文末になっている。文法的にはそうであるが、唄の性質上は、「茶碗なんだ」と、軽く冗談めかして言い放ち、その結果として、「さー」と冗漫な軽味を添える文末を持って来て、唄をリズムカルに賑やかにしている。唄い手のリズム(軽快かそうでないか)や、プロミネンス(どこを強く唄うか)の使い方により、如何

様にも唄うことができるが、「ちやわんむしのうた」は、本来「抗議」「言い訳」したいところを、軽くおどけた調子で唄うからこそ面白いのだろう。地域によっては「ごわんどー」というところもある。



⑤ 茶碗についた虫じやるかい

(そうおっしゃっているのは) 茶碗についた虫のことでしょうか。言外に、「うちの茶碗に虫がついているとでも言うの？」の意味が匂う。

⑥ めごなどけあるく虫じやるかい

「めご」は「籠」。「け歩く」は、「歩く」に卑罵の接頭語「け」を付けた形である。歩く主体である「虫」のことを、卑小で蔑すべきものとして扱っていることを示す。卑罵の接頭語「け」の例として、「け死ん」、「け枯る

っ」、「け忘るっ」、「けだれた」Ⅱ「疲れた」(鹿児島弁辞典サイト 「おんじよどいの小屋」から) などがある。いずれも失望と忌々しい感情が伴う動作である。

又、ここでも、「籠など」と、接尾語を付けているが、「籠」と断定するのをあえて避け、ぼかして、「それとも虫がいたのは) 籠の方とか？」と、とぼけた軽い疑問を内包しており、それとなく相手をおちよくった感じになる。このような言外の意味をわかることが、この唄の真の面白さをわかることである。

⑦ まこてげんねこっじゃ わっはっは

この部分は、オリジナルにはなかったというのだが、伝承されるうち自然にくっついてきたものだろう。「まこて」は、「まことに」「本当に」。「げんね」は元は、「験無くある」で、「げんなか」から「げんね」と転訛し

た形。「恥ずかしい」の意味。従って、「まこととに恥ずかしい（面目ない）ことですよ」となる。「げんなか」は、一般に「恥ずかしい」と訳しているが、共通語の「恥ずかしい」よりも意味が多く深い。「きまりが悪い」「気兼ねである」「申し訳ない」「恥だ」「面目ない」「面映ゆい」など、いろんな意味で使える。

この言葉には、案外謙虚な鹿児島県人の気風が反映されているように思う。

「茶わん虫のうた」は、最近、発祥の地である霧島市隼人において、踊りをつけて全国的に売り出そうとする運動が始まっている（二〇一四年七月二十五日付南日本新聞）。又、NHKの「みんなのうた」でも、二拍子に編曲されて賑やかな上にも賑やかにリメイクされメジャーデビューした（註四）。テンポの良さといい、内容の面白さといい、全国的に広まると、世の中を明るくしてくれること請

け合いだ。

実は、現在住んでいる奈良で、思いがけなくこの唄と出会ったことがある。

二〇〇六年から二〇〇七年にかけて、自宅近くにある特別養護老人福祉施設「かがやきの苑」で対話ボランティアをしていたときである。私が担当したフロアーには、鹿児島出身の方が、今思い出すだけで三名いらつしやり、すべて女性であった。一フロアー二十名くらいの入所者の中で三名というのは、奈良、大阪、京都出身以外では、割合的に鹿児島出身者が最も多かった。こちらに子供さんたちがいて、親御さんを自分の住まいの近くに置く都合上、親御さんたちは、はるばると鹿児島からこの地に移動して来ていらつしやるのである。どなたも認知があるが、鹿児島のアクセントはそのままであり、その方々と話す

ときは、私も鹿児島のアクセントで話した。あるお正月を前にしてのお楽しみ会の時間だった。大方は消極的な顔の輪になった集団の中から、突如小柄なおばあさんが立ち上がり、大きな声で唄い出した。

「んーだもこーら　いーけなもんじゃ・・
・・」

突然のことに私は驚いた。数十年間頭に浮かぶこともなかった「茶わん虫のうた」が、目の前で朗々と展開されているのだった。驚くと共に、なぜか少し気恥ずかしかった。実はこの方は目がご不自由だったが、まことに大きな声で堂々と唄い終わった。私もつい途中から手拍子を取って唱和した。不意に、熱いものが喉を上ってきた。私が自己紹介で、「鹿児島出身です」と言ったことに対して、当然のように、そのおばあさんに「茶わん虫のうた」が蘇ってきたのであろう。

「鹿児島県人なら、唄（うた）がなっどが」（唄えるはずだ）と、彼女はやや厳しい声で言った。私は入所者と一緒に唄うことは好きであったが、歌詞を忘れていたりして皆さん積極的ではない。それで、つい、幼稚園の先生のように声を張り上げ、入所者をリードする態度が出る。そこにいささかの苛立ちも感じておられたのだろうか。あるいは、大方の唄を忘れていて、唯一努力しないで唄えるのがこの唄だったのかもしれない。それにしても、いかにも鹿児島の女性らしい、りりしい態度であった。私は自然と立ち上がって彼女の隣に行き、一緒にもう一回「茶わん虫のうた」を唄い出したのだったが、すぐにむせぶほどになり、声にならなくなった。こんなに遠い場所で、偶然の出会いである私たちが「茶わん虫のうた」一つで、まるで百年の知己のようにつながったことが、思いがけない

感情の発露として深いところからせり上がってきた。

故郷にあっても異郷にあっても、「茶わん虫のうた」は人と人を一瞬にしてつなく温かく明るい唄である。

(二〇一五年刊『朱いちちゃんちゃんこ』掲載作品に加筆修正を加えたもの)

(エッセイスト)

註一：[umudati]の[ɸ]は、そこに特にアクセントがない場合、無声子音 χ と口の開きが狭い母音 u でできているので、語末にくると鹿児島方言では無声化(音を出さない)しやすい。多くは「旅立ち」→「たびだつ」、「夕立」→「ゆうだつ」という風に「つ」に転訛されている。

註二：鹿児島では、 m / b / m の鼻音が最後に来るときは、 N になりがちである。「海／ mi 」→「ウン」、 t ／ m 」→「イン」、 t ／ kana 」→「イケ

ン」、「噛む／ kamu 」→「カン」、「食べもの／ tabemono 」→「タベモン」の如し。

註三：ある音が前後の音の影響を受け別の音になること。ここでは隣り合う「洗い／ arai 」の[ai]が別の音声[e]に変化している。これを相互同化と言う。例として、「大根／ dai.kon 」→「デコン」、 $\text{[灰／} \text{ha} \text{]} \rightarrow \text{[へ]}$ 、「貝／ ka 」→「ケ」等。「蠅／ ha.o 」→「へ」は後ろの[e]に引かれて[he]と同化したものなので、後退同化という言い方をする。

註四：「茶わんむしのクンビョ」SAKAKI MANGO & LIMBA
TRAIN SOUND



入来院貞子さんの

足跡から国体を考える



中西 喜彦

一、貞子さんの足跡

○お別れして早や五年目

初めてお会いしたのは、平成二十二年三月であった。お亡くなりになったのが平成二十三年五月なので、わずか一年二ヶ月のお付き合いであった。筆者は追悼号(二十三年九月)の編集後記に「貞子さんとの別れは辛いけど、本誌で再会しましょう」と記した。本当にその通りになって驚いている。

八号で長女久子さんの額紫陽花の思い出。九号で次女洋子さんの鶴瓶師匠「貞子さん三回忌」落語法要所感。十号では有村美緒子さ

んによる第一回入来薪能スケッチ(当時の南日本新聞掲載)を再掲させて頂けた。ついでに入来薪能の全演目を整理して掲載することが出来た。さらに、「貞子が語る入来文書」および茅門のある町から——」二冊の本も紹介出来た。筆者はこれらを見てやっと貞子さんの入来移住の真意を理解出来たように思ったのである。

○貞子さんと入来薪能

平成六年夏定年退職後東京より入来に移住。平成十年渋谷氏下向七百五十年イベントを成功させ、翌年十一月に第一回入来薪能を開催されている。第一回能「天鼓」を皮切りに、清経、鳥追舟、屋島、忠度を毎年公演し、闘病のため五年休演後平成二十二年に巴を公演され、翌年身罷られている。

特筆すべきことに、鳥追舟は物語の舞台が薩摩川内市の日暮の里であることから、清色

城趾ならぬ薩摩川内市総合運動公園多目的広場で公演されている。さらにそれを記念して鳥追の母子像をJR薩摩川内駅前に建立されている。

その他に文芸誌「火の鳥」の会員として、歴史上の人物の紹介、入来文書の解説をされている。また、真心短歌会を立ち上げ美しい日本語の普及に尽くされている。以上貞子さんの郷里移住後の足跡を要約した。すなわち、祖廟の地入来の町興し事業をご夫妻で実行されたことが良く理解できる。

○入来薪能の意味

貞子さんは生前入来院家と相良家が日本で一番一箇所に定住期間が永いと言って居られた。特に鎌倉時代から江戸時代にかけてはそれを反映して他家にくらべると、記録文書が良く保存されていた。それが周知のエール大学教授朝河貫一博士の「入来文書」となっ

て公表されている。

筆者の疑問はなぜ町興しに薪能かと言うことであった。それが本誌十号で演目を改めて並べて見て初めて理解できたように思った。能の曲目は二百曲程あり、五つのジャンルに分けられるが、その中で上演された曲名は、修羅物（二番目）と雑能（四番目）ものである。能の代表する幽玄美を示す三番目ものは一番もない。それは入来を始め中世の世界はこのような世界だったと言う紹介ではなかったかと思うのである。

貞子さんは早稲田大学文学部史学科国史専攻と言うキャリアを持っておられる。歴史的な視野からの一連の町興し事業は知恵と自費で行われた余人を許さぬ仕事である。一昨年来薩摩川内市入来麓の町興し事業は億を超える公費を使われたと聞く。箱物を作って魂を入れずの状況と比べると貞子さん一連の事

業の質の高さを思うのである。

入来が誇るべき点は茅屋根や茅門ではない。貞子さんの狙いは鎌倉、室町、安土桃山、江戸と約六百年を入来院家で入来周辺を統治した秘訣を研究することにあつたように思われる。入来文書の研究には日本の封建制度とヨーロッパの封建制度の違いとして克明に整理されている。演能を通じてはその時代の合戦や統治の様子などを、勝者と敗者、家長と家来の心理まで含めて示しなかったのではないだろうか。これらの事実を入来町の人々と共有し、世界一長期間団結の続いた町として今後の入来の町興しを目指したものと推察するのである。

さらに、これを推し進め今後の国のあり方について入来から発信しようと考えられたと思う。何者にも遠慮せず自由に意見を開陳出来る本誌「炉ばたセイ談」はそのツールであ

薩摩川内市指定文化財

鳥追の杜

昭和六十年三月二十七日指定

薩摩川内市教育委員会

管理者 薩摩川内市



昔、日暮岡に「日暮長左衛門」という長者が、住んでいた。長者の家臣横瀬左近尉は、奸策をもつて奥方柳御前を離別させ、その後左近尉と通じたお熊を入れた。長者には、柳御前との間にお北と花若の二人の子もがいた。やがて訴訟のため長者は都に上つて長い間帰らなかつた。

その留守中左近尉とお熊は、二人の子どもたちを虐待し、姉弟を鳥追舟に乗せ、太鼓を叩いて毎日水田の水鳥を追わせた。姉弟は人目を忍んで母合の渡して川を挟んで、母の柳御前と対面した。連日の虐待に耐えかねた姉弟は身をはかんで平佐川に身を投げた。村人たちは、これをあわれみ、この地に塚を建て、ねんごろにその霊を弔つた。

謡曲の「鳥追」はこの伝説にちなんだものである。

水鳥を追ひし跡とて名もくちず 松翁（北郷家）
のこるしるしのもりの一むら 十代久瑛

平成十二年三月

『鳥追の杜』案内板（薩摩川内市鳥追町）

る。貞子さん没後五年目にあたり、入来薪能で中世を考えようとしたように、謡曲を題材に我が国のあり様について考えてみたい。

二、謡曲「鶴亀」について

鶴亀や高砂は年初めや結婚式などで披露される有名な謡曲である。今度の第三〇回国文祭鹿児島大会（十一月四、五日）で、宝生流の参加者約五十人が鶴亀を謡う事になった。改めて謡本を良く見ると素直な疑問が浮かんできた。何故唐の玄宗皇帝賛歌かと言う事である。

そこで、十年程前に購入した「謡曲の中の九州王朝（新庄智恵子著）」を取り出し読んでみた。

それは古田武彦氏が長年唱えられている「多元的古代研究」「大和朝廷に先立つ九州王朝あり」と言う説である。新庄氏の意見を要

約すると、鶴亀の内容は九州王朝のあった千代やその後は太宰府から仲哀天皇や、神功皇后の祀られている香椎廟に元旦参詣に行き、祝賀の舞を舞い、帰路の途中駕輿丁（地名）で御輿を早めて無事お帰りになったと言う意味だと言うことである。

能では五十分の所要時間だが、素謡では十二分の曲なので、少し我慢して本文を読んで頂きたい。

アイの玄宗皇帝の宮廷であると言う宣言の後、演技が始まる。

シテ 「それ青陽乃春になれば。四季の節会の事始めワキ 「不老門にて日月乃。光を天子の叡覧にてシテ「百官卿相に至るまで。袖をつらね踵をついでワキ 「其数一億百餘人シテ 「拝をすゝむる万戸の声ワキ 「一同に礼する其音はシテ「天に響きて夥し地

「庭の砂ハ金銀の。庭の砂ハ金銀の。玉を連ねて敷妙の。五百重の錦や瑠璃の枢。シヤコ
 の行桁瑠璃乃橋。池の汀の鶴龜は。蓬萊山も
 餘処ならず。君の恵ぞありがたき。君の恵ぞ
 ありがたき。ワキ「いかに奏聞申し候。毎
 年の嘉例のごとく。鶴龜に舞せられ。其後月
 宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候。地
 「龜八万年の齡を経て。鶴も千代をや。重ぬ
 らん。地「千代のためしの数々に。千代の
 ためしの数々に。何をひかまし姫小松。緑の
 龜も舞ひ遊べば。丹頂の鶴も一千年の。齡を
 君に授け奉り。庭上に参向申しければ。帝も
 御感の餘りにや舞樂乃秘曲ハおもしろや。地
 「月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の
 色々妙なる花の袖。秋ハ時雨の紅葉の葉袖。
 冬ハ冴えゆく雪の袂を。ひるがへす衣も薄紫
 の。雲の上人の舞樂の声々に霓裳羽衣乃
 曲をなせば。山河草木國土ゆたかに千代萬代

と。悦び給へば官人駕輿丁御輿を早め。君の
 齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御成る
 こそ。めでたけれ

新庄氏の根拠は本文末尾の駕輿丁と言う
 地名が太宰府と香椎廟の間にあると言うこと
 である。ネットで調べると駕輿丁と言う地名
 は全国で一箇所だけのようである。糟屋郡の
 駕輿丁公園として残っており、その中に駕輿
 八幡神社が祀られていた。ご祭神は神功皇后
 である。

神社の説明文では当地は天皇の蓮台を担
 ぐ人達の住む部落名として「駕輿丁」が伝え
 られている。これからは私見であるが「官人
 駕輿丁御輿を早め」を「官人も駕輿を担ぐ人
 も御輿を早め」ではなく、官人達は「駕輿丁」
 部落に差し掛かると「隊列を整えて、元氣よ
 く」御輿を早めと解釈する方が自然な気がす

るのである。

さらに、新庄氏は最後の地謡の「白衣の袂」を唐の皇帝が着る筈はないと言う。神主さんが佐賀錦を羽織ったような姿である。また、鶴と亀は九州王朝の象徴であると言う説である。

文献で調べてみるとどうも玄宗皇帝の場合金色赤色の派手な衣装である。白衣はそぐわない。また、象徴は龍であって鶴亀ではない。その爪は唐朝で五本、周辺国では四本だったり、三本と定められていた。それ程象徴に厳格な唐の皇帝が異国の象徴を元旦から用いるだろうか。筆者は古田武彦氏の研究による君が代同様、これも九州王朝賛歌であると確信したのである。国歌では「千代に八千代」とあるが鶴亀は「千代萬代」である。博多に県庁所在地に隣接して千代町があり、古代宮殿があったとも言われ、千代と言う言葉は目

出度の言葉である。八千代は単に修飾語との解説があり、萬代もそれに類することばと考えられる。

ではどうゆう事情で一見玄宗皇帝賛歌のようになったのであろうか。本当の理由は不明であるが、背景は少し理解できた。ご紹介して、読者の意見を待ちたい。

三、我が国は二度占領された

今まで歴史の教科書で教えて来たことと全く違う考えであるが、近年の遺跡年代鑑定技術の進歩や諸古代遺跡の発見により、一層強化された古田氏の多元歴史研究成果は素晴らしいものがある。これに、昔から読み継がれている魏志倭人伝を始めとする中國正史にかかれた史実と照合すると古代の違った世界が展開する。

高橋良典氏は次のようなことを述べてい

る。「古代の日本が六六三年の白村江の戦いに敗れてあと、中国の占領支配を受けたことは『日本書紀』の天智天皇の条の中にそれとなく記されている。すなわち、天智四年（六六五）年の記事では、この年、日本へやってきた唐の使節団の人数が二五四人であったのが、同八年と九年には二千人に膨れあがっている。天智八年十二月の条には・・・大唐郭務悰等二千餘人を遣わしてこらしむ・・・このことは、唐の使者が唯の使者でなく、占領司令部の要員であったことを暗示している。

さらに、天智六年には太宰府が「筑紫都督府」と言う名前に変わっており、唐の軍隊が高麗と百済の都を占領したとき、「平壤都督府」、「熊津都督府」と称していることから唐による日本占領支配の拠となっていたと述べている。

このことはより詳しく古田氏とその調査

研究グループで明らかにされている。しかし、高橋氏の真骨頂はこの時から日本の都城や古墳の設計単位が高麗尺から唐尺にかわり、中国東北部と朝鮮半島、日本を占領した唐の軍隊がこの地域に伝わる固有の文字資料をことごとく抹殺し、漢字でかかれたもの以外は後世につたえないようにしたと述べていることである。それ程厳しい文字環境の中で生き延びた賛歌である。

○何故鶴亀では玄宗皇帝賛歌になったのか

玄宗皇帝が即位したのは七二二年であるから白村江の戦いから約五十年後になる。この間、皇帝は海戦時の高宗からその妻の則天武后となり、国名も周と変えている。それから玄宗の時に唐に復活した。言わば唐中興の祖であり歴代皇帝の中でも在位期間が一番長い。言わば唐朝の第一人者である。その頃我

が国も唐文化の影響を一番強く受けたと考えられる。

一方我が国の方は白村江の戦い以後倭国から日本国誕生の七〇一年まで唐戦勝軍は倭国に六回進駐したとの記録があり、三十九年間は直接支配されたとの見方がある。さらに、天皇の住居と言う意味の紫宸殿が太宰府には地名としても残っているのに、近畿王朝の平城京（七一〇）や難波京（七四四）までは残されていない。中国唐朝の権威に抗しきれず使用出来なかつたとの指摘がある。平安京（七九四）で軀がとれたとの見方がある。

そのようなことから、主は筑紫王ならぬ玄宗、場所は博多から太宰府、象徴は鶴亀松として、密かに歌い継いだものが採譜されたものと考えられる。まさに隠れキリシタンの仏像のようである。

一方、謡曲に白楽天という曲目がある。こ

れは唐の詩人白楽天（ワキ）が日本人の知恵を試すために松浦瀉に現れる。漁翁（前シテ）と漁夫がこれを迎えて、白楽天の正体を当て驚かす。白楽天が詩をつくると、和歌を詠み、日本では人間だけでなく、生あるもの全てを詠むと自慢する。住吉明神（後シテ）が現れ「海青楽」を舞って神力を示し、白楽天に帰国せよという。

さらに、伊勢や石清水の諸神も加わって舞を舞い神風を起こして白楽天を追い返す物語である。

万葉集が大伴家持により完成されたのが七七八年である。「長恨歌」で有名な白楽天（白居易、七七二〜八四六）が生まれたころにはほぼ日本国独特の表現法を獲得しており、漢字文化から換骨奪胎で我が国特有の表現を確立しており、このような曲目も出来たのであろう。

○移動型と定住型の国

我が国が占領された唐と米国は主体が牧畜民族である。これに対して我が国は稲作民族と言われている。この二つの生産形態から来る思考はことなっており、お互い理解できないところがある。例えば牧畜では多頭数の家畜を一年間に亘って給餌飼育しなければならぬ。一方稲作では季節に従って苗を植えたり収穫したりする。移動型と定住型の違いとも言える。

勿論現代は農作業ばかりではないが、タイプとしては鶴が移動して、餌を採るのに対し亀のように一つの池の中で間に合わせる生き方がある。

生き方を環境要因とすると鮮卑族とかアングロサクソン族のような遺伝的要因もまた重要性をもつ。戦争となると東西の歴史で北馬系が南船系より勝利してきた。やはりその

特徴は家畜の大群を常に移動管理する技術に繋がる兵站の上手下手の差によることが大きいように思われる。

現在の中国について岡田英弘氏は中華人民共和国を「盗賊団」共産党王朝であると述べている。また、歴代王朝の繰り返す古代しかないとも述べている。一方、米国も多民族国家であり金融資本、民族、統治にも矛盾が大きい。馬淵睦夫氏の国際金融資本に乗っ取られた国との意見もある。

このような前門の龍、後門の禿げ鷹のような二国に挟まれてわが神国（亀國）は敵の正体を良く見極める必要がある。一つの池の中だけの考えでは第三の敗戦を招くことが考えられる。



四、戦後七十年と日本の今後

執筆当初貞子さんが考えておられたように、入来文書の研究から中世日本のあり方、その具体的な有様を謡曲の中に見つけようと考えた。しかし、同じ謡曲と思つて鶴亀を調べ始めて大きな地雷原に突き当たってしまった。今まで正しい古代史として取り上げられなかった多元史観である。かなり以前からおとぎ話の中に実は古代の歴史が封印されていると言われてきた。能はそのような言い伝えや昔話を下敷きに作成されているものが多い。特に、能楽の詞章は「江戸時代手を加えず保存されていたため」、内容的に明治時代後の影響を受けていない歴史の完全資料である。鶴亀や白楽天で示される内容は六世紀から八世紀にかけての日中の状況を示唆しているように考えるものである。改めて能の奥深さに気が付かされた。中世以上に未知のことが多い。

今年には戦後七十年を迎える。「白村江の戦いによる敗戦」と「大東亜戦争敗戦」とを比較することは大変意味あることと考える。丁度村山談話が出た戦後五十年に、白村江敗戦の後、約五十年後に皇帝になった玄宗皇帝の宮廷賛歌が出来たことになっている。七十年後では第九次遣唐使が難波津から出発している。皇居に関する紫宸殿の言葉が使えるようになるのは平安京遷都の白村江の戦いから一三一年間要している。

現在我が国では戦後七十年を迎え今後の国の方向性を模索中である。今度厚木飛行場の自衛隊機夜間飛行差し止め判決が高裁から出された。ところが米軍機に関してはその限りでないという。横田基地の管制問題も随分前から石原慎太郎氏が指摘されながら未だ解決されていない。これだけみても日本國の米國からの自立は完了していない。國を守つても

らうなど言うことそのものに誤解があるように考える。

今の国会討論やその周辺、マスメディアの状況をみると目先の問題だけを挙げ連ね全体としての方向性が示されていないように思われる。

一方、室伏志畔氏は幻想史学と言う概念を提案している。七世紀と二十世紀は東アジアが激動した時代であり、倭国と日本が敗北した世紀である。その結果、記紀と平和憲法を招来したが、東アジア史の中で考えてきただろうかと言う疑問を呈している。詳細は歴史家に譲るとして、七世紀は唐の東アジア支配に対する、日本の対応であった。即ち、三韓征伐といわれるように朝鮮半島に橋頭堡を持つていた倭国が唐と三韓の干渉から抜け出して日本書紀の編纂で一元的天皇制を確立した世紀であった。以後秀吉の朝鮮征伐までの約

七百年は自分の方からは戦争をしなかった。

一方、二十世紀は新興国米国の東アジア支配に対する我が国の対応であった。これを平和憲法制定で方向付けようとしたが、またもや朝鮮戦争で再軍備を行ったのは地勢的なのであろうか。

五、おわりに

歴史は繰り返すと言うのが一面当然なことと考えられる。人間は世代交代することにより経験はリセットされる。遺伝子は変わることはなく、民族として特徴をもっている。そうすれば民族としての特性が地勢とともに大きな流れを作ってきたのである。

能「鶴亀」では玄宗皇帝に平身低頭した。もつとも面従腹背ではあったが。「白楽天」では、唐の文化代表白楽天に対して、我が国では漁夫のようなものから、あらゆる自然まで

和歌を読むと神風で唐に追い返した。日本文化の復活宣言である。「草木国土悉皆成仏」の思想である。そこまで行くのに、白村江の戦いから約百二十年はかかっている。しかし、現代的には「自然との共生」などと言われているが、我が国のあるべき姿はこの思想に帰依するのではないだろうか。

戦後七十年、在日米軍にお引き取り願うのは何時の日になるだろうか。言葉は文化の根源である。小学生から英語を学ばせようと言う人々がいる限り、占領軍を米国に追い返すにはまだ時間がかかりそうだ。

何れにせよ「龍や禿げ鷹」が乱舞する世の中よりも、「鶴や亀」の舞い遊ぶ世界をつくりたいものである。

(第三十回国民文化祭鹿児島二〇一五「能楽の祭典」企画委員長)



入院院夫妻と著者 平成22年(2010年)3月撮影

知力脚力金力魅力

澁谷 繁樹



京都の知の山脈から、また、峰が一つ消えた。鶴見俊輔さん、知力と脚力を併せ持つ京都型知識人だった。卒寿を超えての往生だから涙は滲まなかったものの、もう一度、杯を交わしたかったな、京都のどつか、ろうたけた一重瞼のオカミのいるごちんまりとした酒亭で。

どこで待ち合わせても特注のアメチヤン大型車を転がしてくる中国人男性留学生がいる。

折り紙付きの頭脳に、大馬力の車でさらに磨きをかけた脚力。金力にも恵まれているんだね、君は、と羨望を投げかけたら、イエイ

エ、両親は二人とも退役公務員で年金暮らし、決して金持ちではありません、と笑う。

留学には金がある。本人は笑いにまぶすけれども、交流網を活用して、ガイド、翻訳、投資と、金がるる木を、何本か持っているらしい。留学先を鹿児島に決めたのも、網の一つ、インターネットで日本各地を検索、カゴシマは自然にあふれた街と当たりをつけたという。二十代、中国では当然、一人っ子になる。生まれたときから、家には、パソコンがあつたのだろう。

世界にさきがけた電化日本との私的幻想は、三十年前に、アメリカで何歩も先を行く電算機を見て、あつさり破れた。韓国では、掌におさまる携帯電話に驚いたし、一九八八年のソウル五輪では、原稿に鉛筆なんてウチくらい、電子機器の完備した記者席で恥ずかしくて、と地方新聞の派遣記者が嘆いている。

中国でも、歓迎の宴席で酔いに任せて、カ
ンノウイロヲオモンジテと長恨歌の冒頭を口
走ったら、宴を主催した若い大富豪が、スマ
ートフォンを取り出してチャツチャツと検索
おう、我が国の大詩人の傑作をそらんじてお
られるとは、だから、日本の知識人は油断で
きません、とお世辞に包まれ、知識人のはし
くれだかなんだかは存じませんが、スマート
フォンなる機器は使った経験がございません
で、とへりくだってしまった。

中国人留学生は、鹿児島にとどまっている
つもりはない。アメリカの大学に留学して、
知力をさらに強靱化する計画を立てている。
今年の秋にもサラバ鹿児島だったのが、父が
病気で倒れ、入院やらなにやら、壮図は一時
停止を余儀なくされた。

一人っ子政策は、何かの際、頼れる兄弟が
いない、一人で奮闘しなければならぬ。な

るだけ最高の医療となると、北京で、となる。
コネもカネも駆使して入院させた病院は、一
泊で二十万円かかる。起き上がれない父は、
中国版新幹線・高鉄で北京まで運んだ。切符
代もかなりの額になる。

古今亭志ん朝の落語に、親不孝者を皮肉る
場面がある。「オヤジの吊いの晩に香典もつて
ジョウロヤに行くヤロウなんざ」。行こうにも
ジョウロヤがなくてかろうじて同種の不幸は
避けているものの、通夜でも葬儀でも酔っぱ
らっていた身としては、自分が中国人留学生
の立場に置かれた場合、とても同じ奮励努力
ができるとは思えなくて、舌を巻くしかなく
なる。

失脚した中国高官の息子は、全裸の女子学
生を乗せたイタリアスーパーカーで天国まで
飛んで行った。似たような連中ばかりだと思
わない方がいい。知も脚も金も備えて中国の

次の時代を担うのは間違いない魅力的な人材が、いくらでも育っている。中国人留学生は、愛車もアメリカまで持つていく。海路と陸路。さても長き旅路よ、いくら、かかるのかねえ。

(鹿児島県NIE教育に新聞を推進協議会事務局長)



清色城の空堀 (2015年2月撮影)

清色城(きよしきじょう)は鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名にある中世山城で、国の史跡。曲輪の間にシラス台地を切り取った断崖絶壁の空堀が設けられています。

時の過ぎぬくままに (5)

エンヤコラ今夜も舟を出す

(告白的恋愛論に代えて)



桐野 三郎

※ 天の声 (序)

二人が睦まじくいるためには

愚かであるほうがいい

立派すぎないほうがいい

立派すぎることは

長持ちしないことだと気付いているほう

がいい

完璧をめざさないほうがいい

完璧なんて不自然なことだと

うそぶいているほうがいい

これはご存知の方も多いはずの、吉野弘の「祝婚歌」といっても、三十四行も続く長い詩の冒頭の八行だが、この八行を口ずさんだだけでも、肩の荷がすつと抜け落ちて行くような安らぎが感じられて、僕も好きな詩である。

もちろんこの詩は題名どおり、作者の故郷山形県は酒田市で、姪御さんが結婚式を挙げることになったとき、自分は所用で出席できなくなってお祝いにプレゼントした詩だ。

という意味で、もちろん「祝婚歌」には違いないのだが、ここで言う「二人」を、時と場合によって色々な関係の二人に置き換えてみても、全編がそのまま通用するのではない。そう解釈してもいいような広がりのある空気がまた魅力である。この詩を「天の声のような」と評した詩人がいる。僕にも異存はない。

ところで、実はこの詩を、この秋結婚する若いカップルに贈りたいから墨書して欲しいと、僕のところに持ちこんできたご婦人がいるのだ。そう、クセの強い悪筆は知る人ぞ知るこの僕に、である。

常識的にはお断わりするのが当然ながら、むげにそうもできない、日頃からお世話になりっぱなしの相手、しかも詩の中味がのっけから「立派すぎないほうがいい」と言っているのだ。下手を承知で頼まれているような気がしてお引き受けた次第だった。

が、さて、そこで持ち込まれた「祝婚歌」のコピーを見ながらいまこれを書いているのだが、なんとこの祝婚歌の一行一行が、だんだん僕自身に語りかけているように思えてきて仕方がない。「墨書してくれ」という依頼こそ、まさに天の声だったのではないか、そう思えてくるほどに――だ。

※ 〈新刊同様 使用回数少なし〉

ことのついでに、と言っては失礼かもしれないが、僕に墨書を依頼された桑木野さんご夫妻について、やはりちよつと触れておきたい。これほど絶妙な調和を保っていらつしやるご夫妻、いやご家庭もだが僕は他に知らない、それほどユニークなご家族だからだ。

一口に言ってご主人は、高校時代からのサッカー少年そのままを、喜寿に近い今日まで通して来られたような人、と言つていいだろう。天衣無縫、あるいは春風駘蕩といった性格が誰からも愛されて、ご当人の不愉快な顔など僕はまだ一度も見ることがない。

ご本業は大きな規模ではないが、長年続いている建設関係の会社経営者。といつても、実務は奥さんや部下に任されることが多いから、サッカー界の（協会役員なども長く努め

られた) 桑木野さんで通っている。

という桑木野さんのいま一つの特性は、大の生き物好きという点だろう。犬や猫の可愛がりようもだが、生きとし生ける物すべての命に對してだ。自宅の庭の鉢植えに毛虫がついていることに気づいたご本人が、鉢ごと車で山まで運び、毛虫にふさわしい木を見つけて毛虫を放たれる話を聞いたときは僕も驚いた。「美しい蝶になって帰って来いよ」という願を込めて——である。

そして又、そのDNAをそのまま引き継がれたのがご長男。大学で獣医学を修めて開業された犬猫病院でも、犬猫はもちろん、命の尊さは虫けらに至るまで全て平等という、損得そっちのけの経営理念には僕も脱帽している。

中学校時代から美貌で有名だったという奥方が、ひとめぐり年長の桑木野さんに嫁がれ

たのも、想像するところあの暖かいお人柄に魅せられてのことだったと思う。が、それにしても子育てを含めた(娘さん一人は嫁がれて主婦)主婦業ばかりか、会社経営の中核まで担ってこられたのだから賢夫人、いや、そればかりか華道師範としての活躍などまで考えると、多才でもあられたわけだ。そんなお二人の関係を遠慮のいらぬ友人として言わせて貰えば、いわゆる恰好の「割れ鍋にとじ蓋」的に見えなくもない。

だがもちろん、こんな似合いのご夫妻でも、長い結婚生活の間には波風も起こる。

さすがの奥方も、家庭や会社の仕事そっちのけでサッカー関係の会合などに明け暮れるご主人に、不満を爆発させられたことがあったらしい。

「もう私も我慢できない！ この家を出て行くわよ！」

しかし桑木野さんは、奥さんのこの剣幕に少しも慌てふためかず、

「そうか、出て行ったられば仕様が無^ねで、俺^{おい}が証明書を書つやつが」と、柳に風の如く受け流されたという。

だが、証明書とは何ぞや？　といぶかる奥さんに、次の再婚相手に対するいわば「品質証明書」だということから、これには奥さんも空いた口が塞がらなかった。

なんと「新品同様、使用回数少なし」と書いてあげるとのたまうたという話、今なお桑木野家に残る伝説だ。

これではまるで中古車の宣伝文句、ケンカになどなるわけがない。奥さんも吹き出さずにはいられなかったという。

桑木野さんとは、どこか仙人のように思えるときもあるぐらいの「生きかた名人」だと、僕はかねがね畏敬の念を抱いているのだが、

これはやはり持つて生まれた天性のご性格だろう。

そして「祝婚歌」に出逢った夫人が、「まるでうちの主人のような・・・」と実感されて、結婚の引き出物として最適と考えられるようになった——そんな流れだったのではないだろうか。いや、僕の勝手な想像だが。

※ くたばる前に「告白的恋愛論を」

さて、前口上が長くなったが、今年には戦後七十年。あの夏、本土決戦を目前にして一億総玉砕を信じ、爆弾を抱えて敵戦車の下に飛び込む覚悟が殆んど出来ていた、中2だった僕が八十三歳である。戦争が終わった歓喜の中で、ひよっとすると僕たちは二十世紀いっぱいぐらいは生きられるのでは？　という嬉しさがこみ上げてきたことを憶えている。それがなんと二十一世紀に入ってすでに十五年

だ。

というこの七十年をひと口で総括すれば、連載を続けている他誌にも書かせていただいたが、僕にとってはまさに「丸儲けの七十年」だった。

もちろんぼくのことだ。失敗や挫折、ほかのチョンボを数え上げればキリがないが、そんな全てをいつも十三歳の夏の、あの恐怖と比べて考えてきたから、「生きちよるだけ」ですでに丸儲けに思えたというわけだ。誇張でなしに、六十八歳のクモ膜下出血だとか、八十歳での大腸ガン手術なども悲壮感や恐怖などとはおよそ無縁であった。

だが、さすがにこの春肺炎を煩って入院した時の心境はこれまでと違った。

「ははあ、なるほど、人間はこんなことを繰り返しながら徐々にあちら岸に近づいて行くのかも・・・」という想いが頭をかすめ、

終活なんてはやりの言葉を思い浮かべたりもした。しかしそれも入院二週間目ぐらいいまで。病状が回復して退院する一ヶ月後には完全に元の自分に還っていた。終活なんぞ語るには「俺はまだ若過ぎる」、いやいや、体力を自慢しているわけではない。人間としてあまりに未熟、勉強不足を恥じての話、まだ終活どころではないと、正直に言いたいわけだ。

だが、一ヶ月にわたる入院を終えた僕に対して、「そろそろお前も、告白的恋愛論を書いておけよ」とけしかける旧友たちがいる。あれはどうやら「桐野がくたばるのも、もうそんなに遠くはないはず」と予感してのことだろう。

でも、もちろんその前に、本誌6号に僕が「告白的『告白的恋愛論』評」を書いたことを受けて、その続きをくたばる前に書いておけ、という催促の意味があるのは分っている。

「告白的恋愛論」の著者は官能小説の世界では世に知られた渡辺淳一。彼の初恋の相手は早逝した美貌の天才少女画家、加清純子だが、彼女が阿寒の雪中で自殺したところ、北海道出身で東京在住の画家の家に下宿していた僕は、画家たちと毎晩のように加清純子のことを語り合っていたのだ。渡辺淳一がまだ学生、作家の卵にすらなっていない六十年以上も昔の話である。

そういう因縁があつて、自分の当時の、失恋話など絡めて書かせて頂いたのが「告白的『告白的恋愛論』評」だった。思い出して「炉ばたセイ談」6号をひもといてみると、なるほど巻末の編集後記にも、亡き入院貞子さんが書いた「惜しむらくは桐野会長の数多いであろう成功のお話のないことでした。これもまたのお楽しみ・・・」なんて文言が目に入る。

貞子さんの言われる「成功の話」とは、当然、僕が書いた空振りの例ではなく、ヒットした、つまり実った恋のことだろう。それを「数多いであろう」と書いてくださったのは光栄の至り。だがこれは単に、僕は酒の席などで「そもそもスケベでない男なんて、男じゃないよ！」などとカッコつけたがる悪癖があるから、そう見えるのかもしれないが、素直な自己評価をいえば、極々平均的日本男性並みで誇るべきものは何もない。

がさて、「平均的日本男性並み」と書いてからふと思うのだが、ところで平均的日本男性の生涯ヒット数、つまり実った恋の数なんてどれ位のものなんだろう。

いちど誰かに尋ねてみたい気がしないでもないが、もちろん知ったところで、いまさら打率アップを狙うほど僕も無謀ではない。

※ 一穴主義者は異教徒？

酒席で初対面の相手と交わす話題で、避けたいほうが良い例から順に言えばまず宗教の話、次いで人種、国籍、学歴などと教わるものだったが、こちらは時代や場所によって変化があっても、最も無難で歓迎される話題は「エッチな話」。これは古今東西変わらない知恵だというけど、これもまた、自分の品位を落とすてしまつては元も子もない。「品良く人前でエッチな会話ができて男は一人前」などと教わるものだった。しかしその辺の加減が結構むずかしい。で、これは僕が聞いた模範回答の一例。

鹿児島市で就職した僕は、役員になつてから四十歳台に、月イチで福岡市で開かれる一泊の経営者セミナーに出席していた。目ざましい成長を遂げている企業のトップを講師に招いて半日勉強し、夜は酒席で交流を深めよ

うという会だ。

その日の講師は北九州市を中心に、クリーニング業界で旋風を巻き起こして急成長をしていた会社の社長。日焼けした顔が若々しい男前だった。

講演が終わつた夜の宴席で、質疑の冒頭に立ち上つたのは熊本ダイハツの社長で、こちらはいかにも社長といわんばかりのでっぷり型。

「今日の講師はすごいハンサムでいらつしやる。女性にモテるであろうことは必定。固い勉強の後の肩ほぐしに、今夜は女性に對するその辺のテクニクをとくところご伝授願いたい」と、でっぷり型にしては座を和ませる軽妙な切り出しだった。

が、これに応えたかの社長の姿はいまも僕の記憶に残っている。質問に応じて立ち上つた彼は、五、六十人ぐらいの出席者をげげん

な顔でぐるりと見回しながらおもむろに口を開いた。

「あのう、念のために伺いますが、今日の出席者の中にまさか一穴主義の方はいらつしやいませんでしょうね？」

もちろん出席者は男だけだ。皆キョトンとして笑っているだけである。一呼吸おいて講師はにっこり笑いながら言った。

「いや、これで安心しました。一穴主義の方は私にとって異教徒みたいな存在ですが、今日ご出席の皆さんは私と同類のようです。だったら女性に対するアプローチのやり方も皆さんと似たり寄ったりで、格別ご披露するよなものは何もありませんよ」

質問も軽妙でけっして悪くはなかったが、この見事な切り返しはそれを上回る洒脱の好例だろう。



※ 世間知らずの東大生

「随筆かごしま」は四年前、一九〇号で休刊に至るまで三十四年間にわたって刊行され、「南日本出版文化賞」も受賞されるなど、郷土に愛された文化誌だった。主宰者は上蘭義之氏だったが、早逝されたため奥さんの上蘭登志子さん（本セイ談会員）になってからのほうがはるかに長かった。

その「随かご」の創刊三十周年記念だっただろうか、祝賀の挨拶の冒頭に立ったのが鹿児島ペンシルクラブ代表の相星雅子さん（同じく本セイ談会員）。

「昨夜（随かご）の創刊号を読み返していましたが・・・」という切り出しに続いて突然、「僕が童貞を失ったのはその寮にはいつて三日目の夜だった。という桐野三郎さんのエッセイなどが出てまいりまして・・・」と続くではないか、これには僕も慌てた。

たしかに、言われてみれば自分でもぼんやり覚えてはいるが、四十歳台で書いたエッセイを傘寿に近い自分が聞かされているのだ。しかもけっこう錚々たる来賓の顔も見える席で、なんと童貞喪失の話を一である。しかも相星さんはそのスピーチの中で触れてくれなかったが、僕が書いた文章の中で、童貞云々はほんの入口の話、書きたかった本筋は、その夜同行した寮仲間に、最初接した娼婦に本気で惚れ込んだ男がいて仲間みんなが心配した、というか、手を焼いたといういわば友情物語だったはず。

だが、その相星さんへの怨みは今回はさておいて、まずは寮生たちの後日談にすこし触れておきたい。

まず簡単に当初の状況から説明すれば、遊廓体験は入寮三日目の夜「童貞は集まれ」という先輩の号令で、五、六人いっしょに新宿

二丁目に繰り出し、値段交渉まで先輩にして貰っていわゆる初体験をした。が、その中の一人、東大に入学したばかりの一年生が初体験の娼婦に夢中になったらしく、自分もバイトで稼がなければならぬ身分のくせに、二丁目に通いつめはじめたということで寮生間で大問題になった。なんとその娼婦を苦界から救い出さなければ、とまで言い出したのだ。もちろん周りの学生は必死に、それが現実的に如何に無謀なことかを入れ代り立ち代り説得したが、徒労に終わった。遂に寮に居づらくなって彼が退寮するとき、中学時代から同級だった僕に言った言葉は今でもはつきり覚えてる。

「桐野、俺たち男としてこの世に生まれてきて、只ひとりの女性も救えもしないで一体何ができるといふんだらうね？」

去り行く彼への寮生仲間の評価は、おおむ

ね「頭の良かはずの東大生にもこげん世間知らずのバカがいたとは！」というような驚きの声だ。半分は僕も同感ながら、いまひとつ「世の中にはこんな珍種の男がまだ存在するんだ！」という新鮮で爽やかな感懐があった。以来、ぷつりと音信の途絶えた彼と、僕が再会を果たしたのは、十二年後、東京オリンピック前年の東京でだった。

※ 貿易商になつた世間知らず

地元（鹿児島市）百貨店の東京事務所長として、僕が西麻布で暮らすようになったころ、なんと、かの世間知らずの東大野郎は日本経済高成長の波に乗って、赤坂の目抜きに居を構える貿易会社の社長にのし上がっていた。

規模はまだ大きくはなかったが、赤坂でも有名なビルのワンフロアで、四、五十人の社員を手足のように動かしている彼の姿は、し

よぼくれた学生時代からは想像もできない躍動感に溢れていた。電話でしゃべる英語など横から聞いていて

「お前の英語、あんなに旨かったかね？」と聞くと、「いや、旨くはないが俺の英語、ケンカとなれば不思議に、次から次に自然と跳び出してくるだよ」などと笑っていたが、彼ののし上っていったエネルギーの根源はやはり、一人の女性も救い得なかった学生時代の無念さがバネになっていたのだろう。もちろんぼくも、学生時代のあの《二丁目事件》には一切触れなかったし、彼自身も語ろうとはしなかったが。

東京での三年間のサラリーマン生活は、彼の再会があつて僕にとつても思いも寄らず、人生の裏表まで覗けた濃密な経験となった。僕といま一人、これも六本木に近い麻布十番に住むシナリオライターの男。彼も中学校時

代から同級の誼^{よし}で貿易屋とつるんでほとんど週に一回以上は銀座、赤坂、六本木はもちろん、彼のベンツに同乗しては横浜あたりまで繰り出すこともざら。そればかりか時にはバーやクラブのママなどまで加わって、箱根や伊豆、千葉県下までゴルフに出かけることもあった。もちろん経費は当時流行の貿易会社接待だ。

貿易会社には当然外国人バイヤーの訪問が多い。中でも上得意ともいえるバイヤーたちへの接待は徹底していた。プライベートの友人まで一緒、という夜の席はより親密度が高まるという理由で、「今夜もすまんが又つき合ってくれないか」という電話があると、半分はこちらも嬉しいくせに「いいよ、何とか時間の都合をつけるから・・・」などと勿体つけては夜の街に繰り出して行くものだった。そして、大きな取り引きには性の提供まで、

というのが万国共通の常識だという彼は、キヤバレーにしてもバーやクラブにしても店のマネージャーと手際よく、閉店後バイヤーの宿泊するホテルに送り込むホステスの手配までやつてのけるのだ。僕らは彼のエネルギーに呆れながら、見て見ぬ振りをするぐらいが関の山だった。

彼はそのころすでに結婚し、二人の娘がいたのだが、六本木でバーを経営する愛人の存在を、僕らには隠そうともしなかった。しかし、そんな強がりこそが学生寮時代を知る僕らから見れば、世間知らずと嗤われた自分に對して今なお、リベンジを続けているように見えなくもなかった。

※ セックスハンターに成長した東大生

そしてこちらは、いま一人の後日談だが、「童貞集まれ」のあの夜、遊廓にでかけるカ

ネがなくて、涙を飲んで我慢していたという男の話。

度の強い眼鏡をかけていかにも秀才という感じの、彼も東大生。僕らのように議論も遊びも好きで徒党を組みたがる寮生とは、一歩距離を置いていたから親しくはなかったが、卒業して有名金属会社に就職したのは知っていた。鉱山関係という業種も珍しかったからだ。

という彼と再会したのは、なんと半世紀あと。僕らの学生寮の、開寮五十周年記念式典が東京で開かれた夜だ。お互いに現役を引退して古稀を過ぎてからだった。

式典が終わって宴席に移ってからすぐ僕の隣に割り込んできた彼が、再会の握手が終わるや否や回りを気にする遠慮などそつちのけで、

「桐野さん、あんた達が新宿二丁目に繰り

出していったあの夜さ」と、初体験の夜のことをいきなり持ち出してきたのには驚かされた。

「ゼニがなかった俺は、残念で悔しくて一晩中泣いていたんだぜ！」という前口上もちよつと意外だったが、というのはもちろん、期待に胸躍らせて出掛けて行つたあの夜の僕は、そんな寮生がいたことなど頭の片隅にもなかったからだ。

しかし、「だけどき、社会に出てからの実績では俺、あんたたちに負けていないと思うぜ！」と、つまり彼がその夜、僕らに自慢したかったのはセックス経験の豊富さ、というか、女体遍歴に関するウンチクだったらしく、僕らは延々と彼のご高説を聞かされる破目となった。

転勤先が十数ヶ国に及んだというから、訪れた国は数十ヶ国、人種も白、黒、黄色と、

国数に匹敵する人種の女性を経験したというのはまんざらホラでもないだろう。ついには「でも最高はやはり中近東の女たちだね。王様たちがハーレムに美女を集めては、次々に子孫を増やしていった歴史のせいだろうが、今でも忘れられないよあの女たち・・・」などと、長々とノロケまで聞かなければならない夜となった。

※ 男と女の間に横たわる深淵^{シエン}



「娼婦はより神に近い」という言葉を僕が知ったのは社会人になってからのことだが、聞いた途端にすっと腑に落ちた。というか納得した。そんな記憶がある。

ファッションやグルメの話題に明け暮れ、男の価値はリッチかどうかだけでしか判断できなない。そんな女たちがバカに見えるから

——というような単純な話ではない。

戦争が終わった昭和二十年の秋、十四歳になったばかりの僕たちの前に忽然と姿を現わした夥しい数の彼女たちが、それまでぼくが見たこともない人種、今流で言えば異星人のように見えたことが根っこにある。「夜の女」後に「パンパン」と呼ばれる女性たちだ。

八月十五日、一億総玉砕を覚悟させられていた日本中が、突然、鬼畜と恐れられていた米英に無条件降伏をしたのである。占領軍がやってきたら日本人はどうなるのだ。無責任な流言蜚語に日本中がまだ怯えていたあの時期に、遠巻きに只うろたえているだけの男たちを尻目に、敢然と鬼畜のフトコロに身を挺していった女たちがいたのだ。

鹿児島市に一千名の米軍が進駐してきたのは、終戦後二ヶ月が過ぎた十月中旬、宿舎に選んだのが僕らの中学校。僕らが追い出さ

れて（伊敷の兵営跡に）出て行くまで二週間ほどかかったと思うが、わずかその間に校門周辺に出没しはじめた異形の女たち（まだモンペ姿が多い普通の女性より派手な服装に、スカーフで顔を隠していた）が、すべて「娼婦」といわれる女たちだと知ったときの僕の驚きは、いま思い返してみてもやはり一種、異様な世界が目前に出現したようだった。

もちろん日本中が飢えていた時代だ。背に腹は変えられない。だから大事な呉服をたとえば米と交換する。もちろんこれはよく分かる。だが、あの激しい戦争が終わったばかりの敵兵に自分の身を売る。それに恐怖を感じないばかりか最も効果的なビジネスだと知っていた女たち。まさかあれだけの女たちが経験的にそれを学習してきたプロばかりだったはずはない。大部分は、せいぜい片言の英語を並べられる程度のアマチュアだったはずで

ある。

その女たちが、うろたえる男たちを尻目にヤンキーのふところに飛び込んでいった姿を見て、「女とは、男とは異なる嗅覚、あるいは本能といってもいいような何かを持っているのではないか？」そんな疑問が芽生えたような気がする。つまり男にはとても理解できない何か、それを感じた少年の日の疑惑に応える回答が「娼婦はより神に近い」という言葉だった、とでもいうような・・・。

戦後、焼野ヶ原と化した鹿児島市中をヤンキーたちと、腕を組んで闊歩するパンパンという名の娼婦たち。彼女たちを遠巻きに眺めていた十四歳の僕の胸中には、明らかに畏怖、あるいは畏敬といってもいいような感懐が含まれていた、そしてそれは今なお、僕の女性観の底に流れている。



※ 沖の村残影

たしかに「男と女の間には 深くて暗い川がある」なんて歌があるのを知ったりして、僕の女性観もすこしは成熟していったのだろうが、よりはつきりと輪郭が見えたように感じたのは、「性の違いは種の違いより大きい」という著名な生物学者の言葉に接したときだ。

「なるほど、やっぱりそうだったんだ」。つまり、世間知らずの僕は終戦の秋に出現したあの娼婦たちを見て、はじめてその「大きな違い」の存在に、漠然とながら気がついていたということだろう——と納得した。

それでも、男が初体験とやらを済ませれば当然、大人になったような気分になるのは本当だ。ついこの前、値段交渉までして貰って体験したばかりの大学一年生のくせ、新宿西口の飲み屋街で一杯三十円のウメ割りやブドウ割りを煽っては、

「酒は飲むべし百薬の長、女は買うべし無上の快樂！」などと仲間内で氣勢をあげ、学割の効く夜更けを待つては二丁目に繰り出して行く、そんな季節もたしかにほんのしばらくは続いた。が、やがて、そんな季節の空しさにも気づく。僕もそうだった。

鹿児島市内には古くから知られた遊廓街としては、沖の村があつた。新興の易居町界わいに点在する「青線」地帯に比べると、歴史の古い公認の「赤線」地帯だ。

たしか大学三年の夏だった。休暇で帰省していた僕は、先に就職して社会人になっていた親友に誘われて天文館で深夜まで飲んでたのだが、夜半過ぎると開いている店がない。語り足りない友人が言い出したのが、「おい、今から沖の村で飲んが！」だった。やがて売春禁止法で消え去る運命と聞かされていたこともあつて、一度は僕も行ってみたいと思つ

ていた矢先、即OKで出かけたのはいいが――。

ぼんやり残っている僕の記憶は、紅灯の巷などという色気などとは無縁の、セピア色に変色した古い一葉の侘しい写真のような光景だけだ。

何せ夜半過ぎに、酒を飲むためにだけ上りこんだ二十歳そこそこの男二人を相手に、二人の娼婦もどんな対応をしてくれるのか戸迷ったのかもしれない。広めの和室にちやぶ台を挟んで、やたら世慣れた世間話で場を保とうとする友人を尻目に、僕はひたすら焼酎の徳利を傾けるだけ。ときおり少々くたびれかけた娼婦たちの顔を盗み視ては、終戦後、スカーフで顔を覆ってヤンキーたちの前に出現した女性群の中に、彼女もいたのだろうか？と考え、しばらくしては又、いや、その前に、鳴池航空隊から零戦^{ゼロ}で飛び立っていった特攻

兵たちは、出撃前夜には沖の村宿泊が許されたと聞くものだったが、彼女たちはどんな想いで死地に赴く若者たちとの夜を過ごしたのだろうか――などと考え出す始末。もちろん、そんな話題を口にするほど僕も無神経ではない。

夜明け前に沖の村を出るころには、折角の酔いも醒めきっていた。そしてその朝、床についてからも「彼女たちの生きてきた人生の厚みに較べれば、俺の人生のなんと薄っぺらなことか」などという、自虐的想いが追いかけてきて眠れなかった。

※ ラヴリーな時間



日本経済が急成長するにつれ、海外旅行が日常的になってからは、日本人の男性の買春ツアーなんていうのも有名になった。特に台

湾、韓国、桑港などに繰り出して行く団体旅行などだ。

もうその頃、僕自身がそんな性処理セックスなど必要としない状況になっていたこともあって、おおっぴらに語られるそのテの戦果などにはむしろ嫌悪感を持つようになっていた。自分が大切に心のどこかに仕舞っておいた領域が、土足で踏みにじられてゆくような、とでもいう心境だったのかもしれない。

カリフォルニアは、もうメキシコ国境に近いサンジェゴで開かれる流通問題の研修会に出かけた途中、サンフランシスコに立ち寄った夜だった。

夕食後、ホテル近くの映画館ではポルノ映画をやっていると聞いて、たまにはそのテの映画も見えておこうと出かけたことがある。映画の内容については一片の記憶も残っていないが、驚いたのは映画の終映後、映画館前の

通路に延々と並んでる娼婦の数の多さだった。

「私は50ドルでいいけどどう？」などと
いうあけすけな誘いを払い除けながら、列の
終わりに近く、こちらを見やりながらも黙っ
たままの娼婦には、ついこちらから声を発し
ていた。

「暇ひまそうだね？」に対して「とても閑ひまなの」と
言い返してきた笑顔が若い。

「君を買うつもりはないが、閑なら酒ぐら
いつき合うよ。俺のホテルはすぐそこだから」
すると以外にも、「うれしいな、でも友達
も一緒でいい？」

で結局、その夜ぼくはホテルの最上階のバ
ーから、カクテルなど片手に、シスコの夜景
と娼婦たちの四方山話を楽しんだのだが、今
でもサンフランシスコと聞いて真っ先に思い
浮かぶのは、あの娼婦たちとのラヴリーな時
間だ。

シスコだけではない。しかも娼婦だけでもない。ストリップパーもいれば芸者たちとの話らいもあつた。ハバロフスク、シドニー、熱海や修善寺、いわゆる紅灯の巷で遊んだ記憶の中でも、人生の快いアクセントとして残っているのは、むしろセックス抜きに触れ合っただけである。



※ センチメンタルジャーニー

旅とは日常から脱出した非日常の時間。人生を振り返ってみても、その時間帯はやはり際立つ色彩で記憶の中に刷り込まれているのだが、人生にはさらにその時間帯に飛び込んでくる思いもかけぬハプニングがあつて、さらに陰影を深めて行く。

もちろんそんなハプニングは、リッチで明るく楽しい記憶も悪くはないが、僕らの胸に

深く沁み込んでいるのはどちらかといえども、哀愁を帯びた場末感とでもいうような切なさを伴う記憶が多い。これはやはり「戦中派」といわれる世代感覚のようなものだろうか。

音痴の僕がカラオケに挑戦をはじめて数年が経つ。カラオケ店で選べる曲数はいまや十萬曲以上もあるというのに驚く。

そして日本人好みの演歌の七割以上は不倫の歌だと聞いたが、それはともかく、この世の歌の大半は男と女を歌つたものだろう。もちろん自分が歌う曲はそれなりに、自分の脳裡に浮かび上ってくる情景と重ね合わせていることが多いのだが、次々に覚えたくなる歌にはまた魅力的な世界が垣間見えるのだ。「俺の人生まだまだ勉強不足」という思いに駆られる一因である。

ここで突然引っぱり出して申しわけない

が、渡辺淳一の「告白的恋愛論」を読んだ読者の一人、さる女性が「この作家は本・当・の・恋愛を一度もしたことがない人だ」と評していたのをふと思いつく。

オンナを描かせては超有名な売れっ子作家が書いた豊富な恋愛経験も、一人の女性読者から「一度も本・当・の・恋愛をしたことはない男」と簡単に切り捨てられる。それほど深淵な溝が男と女の間を横たわっているということだろう。なにせ女性の違いは種の違いよりも大きいというのだ。片方から見れば命がけの熱烈な恋の経験も、いま一方から見ればほんのお遊びでしかないケースなどざら。だからこそ次から次に新しい歌が生まれ、新たな恋が語られるということにもなるのだろう。たしかテレビでだったと思うが、禅宗の偉いお坊さんなのだが、煙草好きと女好きという悪癖が生涯なおらなかったという逸話を聞

いた（見た？）記憶がある。煙草もだが、女好きは、檀家中の後家さんの家を洩れなく訪ね回っては口説くので、村中の評判になって困った。さすがに檀家代表も放っておけず注意しに参上するのだが、お坊さんは素直に「はい、はい、分かりましたよ」という返事だけはなさるのだが、女好きは一生続いたという話。

それでも高僧として尊敬された理由が何故かは僕にはよく分からなかったが、やはり男と女との間に横たわる神秘とでもいうような、何かを考えさせる話として僕の記憶に残っている。

ともあれ、この世が男と女という性の違いのない世界だったら、僕など片時も生きる気がしなかっただろう。異なる二つの性があればこそ歓喜もあれば、絶望にも突き落とされるという、この性の違いこそがこの世を動か

している原動力になっっていることは、まぎれもない事実なのだから。

※ 天の声 (続)

二人のうちどちらかが

ふざけているほうがいい

ずっこけているほうがいい

互いに非難することがあっても

非難できる資格が自分にあつたかどうか

あとで

疑わしくなるほうがいい

正しいことを言うときは

少しひかえめにするほうがいい

正しいことを言うときは

相手を傷つけやすいものだと

気付いているほうがいい

立派でありたいとか

正しくありたいとかいう

無理な緊張には

色目を使わず

ゆったり ゆたかに

光を浴びているほうがいい

健康で 風に吹かれながら

生きていることになつかしさに

ふと 胸が熱くなる

そんな日があつてもいい

そして

なぜ胸が熱くなるのか

黙っていても

二人にはわかるのであつてほしい

これが祝婚歌、冒頭に掲げた人行に続く残りの二十六行だ。

でもこの結婚を祝う長い詩の中に、「愛」という結婚式などにはつきものと言つてもいいぐらいの文字が、一つも出てこないのを、

不審に思う人もいるのではないだろうか？

天の声ともいわれるこのすばらしい詩に、
 ぼくのような門外漢が、無くもがなの落ちを
 つけるような気がしないでもないが、実はそ
 ういう心を縛りつけるような、窮屈な言葉が
 一字も登場しないのがまた、この詩の奥深さ
 だという気がするのだが、どうだろう。

さらにうがった見方をすれば、これは吉野
 弘が自分の姪の結婚式、つまり花嫁にプレゼ
 ントした詩である。そこで言外に「男に一穴
 主義の男なんていないのだから、一度や二度
 の浮気ぐらいで短気を起こしては駄目だよ」
 という想いまで込めて諭しているような詩、
 と詠めないこともないような・・・。

閑話休題、祝婚歌の墨書を僕に頼まれた桑
 木野さんのご主人はもちろんだが、祝婚歌の
 詩人吉野弘も、僕にとつての異星人、つまり
 一穴主義者ではなかったはず、と僕は思つて

いる。

そもそもオトコとオンナを創造し給うた
 造物主の狙いは唯ひとつ、人類の繁殖だけだ
 ったはず。夫婦というペアが円満に、なんて
 優生学的にいつてもマイナスにこそなれ、何
 の益もないことなど考慮されるはずがない。

いや、だからこそ男と女というペアの在り
 方について、人類はさまざまの試行錯誤をく
 り返してきたのだろうが、現代の風潮を一言
 でいえば「何でもあり」の無秩序時代。そし
 てこの祝婚歌は、そんな時代の到来を予知し
 ていたかのように、「愚かな悪あがきはやめた
 ほうがいいよ」とおだやかに諭している、僕
 にはそう聞こえてくるのだが――。

遅まきながらこの詩に出逢ったこともあ
 つて、今なお素敵な女性への憧憬は抱いても、
 老妻との間に波風の立つ心配はもうない。と
 きおりカラオケ店に出かけては、彼女の歌う

「黒の舟唄」などに耳を傾けるだけだ。

男と女の間には

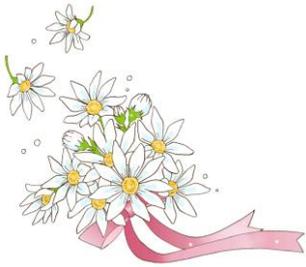
ふかくて暗い河がある

誰も渡れぬ河なれど

エンヤコラ今夜も舟を出す

そうそう、渡れないことは分かっていても、
舟を出す気持ちだけは僕もまだ失っていない。

(エッセイスト)



『炉ばたセイ談』は、『炉ばたセイ談会』（入来武家屋敷茅葺門邸）が一年に一回（8月）発刊する機関誌です。『セイ談』のセイは聖、清、正から醒、政、性まで、つまり話題は問わずお互いの蒙を啓こうという程度の、堅苦しくない会という意味です。

編集後記・・・

■本誌生みの親貞子さん没後5年目を迎えました。長女の串田久子氏に、7回も苦労して入来新能を主催された身内の立場で、寄稿して貰いました。当初能舞台は鹿児島県内にはなく、自分達で岡山まで車で見本を見に行き、能舞台から作って居られます。その積極性と勇氣に改めて感動を覚えます。■昨年の投稿者に加え、病気で暫く休筆中の百田氏が復帰されました。本誌を引っ張ってこられた桐野会長は、二度の入院にもかかわらず長編原稿を投稿されています。何とか肖りたいものです。■石の上にも3年と申しますが、冊子継続早くも5年、重朝庵主の長寿を祈念しております。(中西喜彦)

■貞子さんの後を引き継いでから、5回目の編集作業となり、書式・体裁もすっかり定着しました。そのため編集作業が随分効率良く行えるようになってきています。そして、今回はメールのやり取りだけで編集作業をすませました。便利になったものと改めて実感です。(下土橋渡)

■ご無沙汰をしているといなくなってしまう人が多くなってきました。東京なら北、アメリカなら西、ご自宅の方に向かって合掌と礼拝でお許し願っている

けれども、門にまで先立たれてしまうと、はて、どうやって弔うか、取り敢えず、入来に向かい手を合わせる。■台風で入来院家の茅葺き門が倒壊した。竹林の手入れに行かなきゃならない、思うだけで実行が伴わないでいたら、強い風に乗ってサヨナラ、勝手口からの出入り人でも落ち葉を取り除いたり馴染みだつたのに、自分だけアッサリ旅立ってしまったね、君は。■門も門だが当主の心配はどこに行っちゃったんだ、声が聞こえない気がしないでもないもの、大風くらいで吹き飛ばされる存在でもなさろう。門でヨカッタ、胸をなでおろしていないわけでもない、複雑な心持ちのまま、長い間、お疲れさまでしたねえ。(澁谷繁樹)

「炬ばたセイ談」 第11号

炬ばたセイ談会会長

桐野三郎

編集担当 中西喜彦・下土橋渡・澁谷繁樹

事務局T895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



平成27年秋

第11号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局